



柏の現代寺院建築

鉄筋コンクリート造

柏市建造物調査報告書 

柏市教育委員会
2026

柏の現代寺院建築

鉄筋コンクリート造

柏市建造物調査報告書 9

例 言

1. 本書は、柏市教育委員会生涯学習部文化課（以下、「文化課」）が実施した建造物調査の記録である。
2. 令和 5-6 年度（2023-2024）に、市費による文化課直営事業として調査を実施した。2 カ年に及んだ調査のうち、柏市内に所在する比較的新しい時代に建てられた寺院建築に焦点を当てて、本報告書にまとめる。各対象の現地調査日を下記する。

分布調査	2023 年 12 月 4 日、12 月 11 日
寿量院	2023 年 9 月 26 日
聖徳寺	2023 年 11 月 13 日
行念寺	2024 年 2 月 29 日
宗寿寺	2024 年 11 月 11 日
正光寺	2025 年 2 月 9 日

3. 本報告書作成の担当は以下のとおりである。現地調査は、金出ミチル [柏市文化財保護委員]、江藤隆博 [文化課] が行い、資料調査は同課の池亜希（古写真収集）、高野博夫（資料翻刻 p78-79）が手がけた。写真撮影は江藤隆博（序章以外）、執筆・図面作成・写真撮影（序章）・編集は金出ミチルが担当した。

4. 資料・写真・図面の出典及び所蔵については、それぞれキャプションに記す。特記のない写真・図面は報告書作成者による。

5. 掲載した図面の寸法はミリを単位とする。

6. 調査及び本書の刊行に際して多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。
ここに記して謝意を表します。（敬称略、順不同）

正光寺	寿量院	行念寺
飯嶋賢峰	羽子田範宥	吉井泰遠
聖徳寺	宗寿寺	須藤建築事務所
飯嶋賢壽	白井信樹	須藤英華



案内図 千葉県柏市



個別調査対象寺院 位置図

千葉県柏市

目次

序章	7
建築家須藤十郎	25
第1章 正光寺本堂	29
第2章 聖徳寺本堂	45
双子の本堂：聖徳寺と寿量院	57
第3章 寿量院本堂	61
本堂と庫裡	82
第4章 宗寿寺本堂	83
第5章 行念寺本堂	103

序 章

建物は、災害に遭うたびに強くなる。

木造建築の立ち並ぶ都市は、大火や地震に見舞われるたびに再建され、耐火性の高い瓦葺の屋根や土蔵造などの普及を通して姿を変えてきた。歴史の教科書でも伝えられるように、今日私たちが目にする建物のかたちには、各時代の経験が積み重ねられている。

明治時代初期、近代化を進める日本では、お雇い外国人の技師たちの指導のもと建築教育が開始され、国家の象徴となる建物が西洋の様式を取り入れて設計されるようになった。同時に、日本建築の歴史が初めてひもとかれていった。今までの建築の経緯を整理することは、これからの建築のあり方を考えることに自然と繋がってゆく。西洋技術の導入と応用、建築材料の生産と流通、さらには情報伝達の手段が発達するとともに、和風建築の構造と意匠も変化してきた。

一方、明治初期に神仏分離令を受けて境内地と建物に特に大きな影響が及んだ寺院については、早くから建物と宝物の保護の必要性の声があがり、ようやく明治30年（1897）に古社寺保存法が制定された。この法律のもとで指定された特別保護建造物に対して、順次実施された保存修理工事を通して、建築史及び建築様式や技術の研究はさらに深められてゆくこととなった。このような法律を求めて明治28年（1895）建築学会誌『建築雑誌』に掲載された論説の筆者は、後年多様な鉄筋コンクリート造^{ぞう}の宗教建築を展開する伊東忠太であったと考えられている。

急激な変化を遂げる社会情勢の中で、日本建築の象徴ともいえる寺院の本堂はどのように変化してきたのだろうか。

災害後の建築技術の展開

明治24年（1891）に発生した濃尾地震は、東海地方の建築に大きな被害を及ぼし、この被災状況は鮮明な写真による記録が残されている（注1）。この際の工場などの大型煉瓦造建築の大破を受けて建築学会（現日本建築学会）は、煉瓦積み目地の強化を図り、石灰モルタルへのセメント混入率を高めることを推進した。

コンクリートが新たな建築材料として注目されるのは明治時代末になってからで、明治40年（1907）の大火で焼失した函館東本願寺別院（伊藤平左衛門九世設計／大正4年 [1915]）が鉄筋コンクリート造で再建されたのが、寺院建築の中では先駆けとなった。この別院では、伝統的な木造建築の形式と細部が新しい構造で実現されている。

建築の構造が飛躍的に変化するのは、大正12年（1923）に発生した関東大震災後の復興においてである。耐火性と耐震性を誇る鉄筋コンクリート造の技術開発が重ねられ、強度の高い構造に加え

注1 広く知られる写真集に、日本水道の父 W. K. バルトンと地震学の父 J. ミルンが作成した小川一眞印刷『The Great Earthquake in Japan (日本の大地震 1891)』がある。

意匠上の新規性が盛り込まれた建物群は積極的に採用され、地震と火事により甚大な被害を受けた首都圏は防災都市として建て替えられていった。

この時期には、合理主義をかかげたモダニズムが主流となり、煉瓦造の躯体を鉄筋コンクリート造に置き換えるだけでなく、建築材料の特徴を建物のかたちにあらわす設計が行われるようになった。都会で集って暮らす同潤会アパートや、小公園と隣り合わせで設置された防災拠点ともなる「復興小学校」が、象徴的な建築作品である。千葉県下では、東京市による復興事業に類似する構造が学校建築に採用され、現存するものには野田小学校（現野田市立中央小学校、1927 及び 1932）や千葉中学校講堂（現千葉県立千葉高等学校講堂、1927）などがある。

変化する宗教建築

20 世紀に入ってからの寺院の本堂建築も、コンクリートという新たな材料を用いることによって、今までにない速さで形式が変化し、建設時やその後経てきた時代の社会状況を反映する。

特に、関東大震災後の鉄筋コンクリート造建築の展開の流れの中で異彩を放ったのが、伊東忠太の設計による作品である。日本建築の歴史を明らかにするためにアジアを踏破した建築家は、鉄筋コンクリート造による造形の可能性にかけて、自身の歴史観を反映させた作品をつくりあげた。特に、築地本願寺（1934 年築、重要文化財）は、アジアからの仏教伝来を象徴すると判断された「インド式」（後述）を外観意匠に大胆に取り入れ、広く知られるようになった。以来、鉄筋コンクリート造寺院に採用される主な形式のひとつとなり、今日もこの影響が広く見受けられる。

伊東忠太設計による東京近郊の代表的な宗教建築として他には、東京都慰霊堂（旧震災記念堂）（1930 年築、東京都選定歴史的建造物）、法華経寺正教殿（1931 年築）、湯島聖堂大成殿（1935 年築、国史跡内）などがあげられる。

伊坂道子「増上寺境内における常行院納骨堂について 常行院のあゆみと震災復興期に建設された RC 造の和風堂舎への考察」（2019 年度日本建築学会関東支部研究報告集 2020.3 所収）では、増上寺の子院常行院に、関東大震災後の墓地整理に伴い昭和 5 年（1930）に建設された「防火耐震構造」の納骨堂を取り上げ、周囲の環境を考慮した木造霊廟建築のような伝統形式が鉄筋コンクリート造で



東京都慰霊堂（旧震災記念堂）1930 伊東忠太設計
東京都選定歴史的建造物



湯島聖堂大成殿 1935 伊東忠太設計
国史跡

実現された経緯を考察する。当寺の納骨堂以外は、第二次世界大戦時の空襲時に焼失している。

昭和13年（1938）には戦時体制下の国家総動員法による建築資材の統制が行われ、また第二次世界大戦後の復興期の材料と職人不足により、コンクリートを自由な表現の材料として利用する勢いは、しばらく封印されることとなった。

1950年代中期以降、我が国の高度経済成長期には多様な建築造形に鉄筋コンクリート造や鉄骨鉄筋コンクリート造が用いられるようになり、建物種によっては高層化が図られ、都市景観は大きく変えられていった。

柏では、1955年に発生した柏駅前大火の経験から市街地の不燃化が進められ、1964年の東京オリンピック開催を前に建設ラッシュに沸いた頃には、市内各地に団地が造成された。本報告書で対象とするのは、この時期に建てられた鉄筋コンクリート造寺院建築である。

構造が明らかなものについては「鉄筋コンクリート造」を使用し、下記の書籍や材料としてコンクリートを用いた構造物で補強方法を問わない場合には「コンクリート造」と表記する。

コンクリート造寺院建築の研究

昭和初期から昭和中期にかけて出現した比較的新たな寺院建築を歴史として評価する試みが、近年特に見られるようになっている。

今日の動向に繋がる先駆的な文献として、横山秀哉による『コンクリート造の寺院建築』（彰国社、1977）があげられる。この本は、昭和中期のコンクリート造寺院建設の真ただ中に身を置いて執筆されており、建築作品をその外観より「伝統式」・「インド式」・「近代式」に分類している。独自の分類方法、参照事例の多さ、当時の社会的背景を反映する考察などを含み、唯一の先行研究と呼べる内容である。著者は愛知県瀬戸市の曹洞宗寺院慶昌院が実家で、境内の納骨堂（現 白雲堂）（1966）と秋葉堂（現 秋葉真殿）（1967）の設計を手がけている。東北工業大学教授在任中に、この主題で論文発表をしている。

巻末の一覧表には、500棟を超える国内のコンクリート造の寺院建築が記載されている。このうち、千葉県下の作品は、新勝寺大本堂（吉田五十八設計／1963、成田市）・長楽寺本堂（クリート環境／



浅草寺本堂 1954 大岡實設計



増上寺大殿本堂 1974 大岡實設計

1967、木更津市)・法華経寺聖教殿(伊東忠太設計/1931、市川市)・妙行寺報恩塔(柴垣鼎太郎設計/1929、市川市)の4棟のみである。当時建築界でも脚光を浴びた清澄寺祖師堂(内井昭蔵設計/1972、鴨川市)は完成していたものの、鉄骨鉄筋コンクリート造であることから含まれなかったであろう。

昭和中期に建てられた建築に見られる時代の勢いや設計方針、材料の選定や、建築の維持管理方法に言及する近年の論考の中でも、横山の著作は参照され続けている。

例えば、長谷川尚人「近代西本願寺の別院本堂建築における「印度仏教式」意匠について」九州大学大学院、2012.3では、横山(1977)による「インド式」の分類の意匠上の原点を探る。また、佐々木健・戸田千春「東京都の非木造寺院本堂の様式の変遷 1972年の調査以降の本堂と複合型の影響」日本建築学会技術報告集、2022.6では、横山の提案した3つの分類を今日見る作品を追加することで細分化し、現況を分析している。

青柳憲昌と安田徹也を中心とする大岡實の作品に関する研究は、建築歴史を専門とする大岡實の建築設計に焦点を当て、戦後急速に広まった鉄筋コンクリート造の宗教建築の歴史性と社会的意味合いを考察する。当時国宝保存法のもとで国宝に指定されながら戦災を受けて焼失した浅草寺本堂の再建(1954)が、大岡の鉄筋コンクリート造による宗教建築設計の嚆矢となった。前身建物に倣って再建するのではなく、伝統的な様式を新たな建築として表現する試みが全国各地で行われた(注2)。

増上寺大殿本堂は、大岡の設計により昭和49年(1974)に完成しており、後述するように柏の行念寺本堂が鉄筋コンクリート造で建てられることとなった「縁結び」の作品とも言える(p103参照)。

モダニズム作品の例としては、福井神社があげられる。1957年に竣工された福井神社は、第二次世界大戦時の空襲と1948年の福井地震からの復興を象徴するように五十嵐直雄により境内地とともに設計された。福井工業大学の学生であった朝日海秀によりこの作品の調査研究が進められたことを受けて、近現代の建築環境遺産を対象とするDOCOMOMO Japanの選定建造物となり、まちづくりの中のひとつの焦点として位置付けられた(注3)。

コンクリート造宗教建築の文化財

国による文化財保護の対象として、コンクリート造の寺院建築に注目してみる。国指定及び国登録文化財のうち、本調査の対象と並ぶ分類の建物を拾い出したところ、大半が和風の伝統的な宗教建築の形式をコンクリートの造形に置き換えたもので、意匠を簡略化したものもある。前述のように、築地本願寺本堂(1934)は、古代インド仏教様式を思わせる特異な形式からなり、高田別院本堂(1959)が同形式を現代的な解釈で用いる(p11参照)。

ここでは対象としないものの、都道府県や市町村による指定・登録文化財や未指定の文化財にも、類例があり、コンクリート造の宗教建築を歴史ある建物として捉えて、地域の暮らしやまちづくりやの中で将来にわたり大切に扱う体制が形成されてきている。

注2 『建築史家・大岡實の建築 鉄筋コンクリート造による伝統表現の試み』川崎市立日本民家園、2013

注3 「福井神社」建築雑誌2024年11月号所収

国の文化財に指定・登録されているコンクリート造宗教建築

文化庁の「文化遺産オンライン」及び「国指定文化財データベース」で建造物のうち、「コンクリート造」と「寺」・「神社」、または「宗教」を検索して該当する建造物のうち、本堂・社殿に注目して拾い出した。(2026年1月現在。以下の分類に該当するものは除外した：キリスト教会・鐘楼・門・橋・宝物館・鳥居・納骨堂・霊屋・位牌堂・手水舎・塔・宝蔵・経蔵・鐘楼・神庫・墓)

本書で取り上げていない建物のうち、長林寺本堂・織姫神社社殿は小林福太郎が、神田神社は伊東忠太を顧問として大江新太郎と佐藤功一が設計した。昭和後期に建てられた恵日山観音寺観音堂は戦災に失われた旧国宝を建築史家村田治郎が復元し、高山寺本堂は大岡實の作品である。この時代の建物は完成から50年を経て、文化財として扱われ始めたばかりである。

文化財分類・時代	名称	建築年	指定・登録年	都道府県
国重要文化財 近代				
	大谷派本願寺函館別院本堂	1915	2007	北海道
	築地本願寺本堂	1934	2014	東京都
国登録文化財 大正期				
	明光寺本堂	1924	2021	福岡県
国登録文化財 昭和前期				
	浄福寺本堂	1927	2021	新潟県
	浄善寺本堂	1928	2019	新潟県
	長林寺本堂	1929	2004	栃木県
	心光寺本堂	1929	2003	大阪府
	選擇寺本堂	1930	2000	千葉県
	西徳寺本堂	1930	2024	東京都
	清水寺本堂	1931	1999	静岡県
	貞照寺本堂	1933	2006	岐阜県
	神田神社本殿・幣殿・拝殿	1934	2003	東京都
	織姫神社社殿	1937	2004	栃木県
国登録文化財 昭和中期				
	善光寺雲上殿本殿	1949	2025	長野県
	金剛院本堂	1954	2014	東京都
	高岩寺本堂	1957	2009	東京都
	高田別院本堂	1959	2015	新潟県
	四天王寺金堂	1961	2022	大阪府
	四天王寺講堂	1963	2022	大阪府
国登録文化財 昭和後期				
	恵日山観音寺観音堂	1968	2022	三重県
	高山寺本堂	1968	2025	和歌山県

柏の現代寺院建築の発見

2020年度より柏市教育委員会文化課では、文化財保存活用地域計画策定（2023年に認定）を目的とする調査の一環として、歴史的建造物の所在確認を悉皆的に行うために市内を回り始めていた。調査開始時には、社寺建築が鉄筋コンクリート造に建て替えられていれば、歴史的建造物に該当しないと考えていたのだが、徐々にこれらの建て替えにあたっては事業主となった寺と檀家たちの意向が強く反映されていることを意識するようになった。

塚崎の小高い丘陵の上に白亜の宮殿のような建物がそびえ立っていた。手前に墓地と参道があることから寺であることはわかったが、見たことのない光景に足早に近づいて行く。石段を登ると、ハスの花を模したという大きな屋根を頂く鉄筋コンクリート造の寿量院本堂（1970年築）があった。境内には粘板岩からなる石碑があり、裏面の陰刻から、本堂は木造の庫裡と同時に完成したことが読み取れた。設計者は須藤十郎、松井源吾の名も見られる。モダニストの建築家たちがどのようにしてこの寺と関わるようになったのだろうか。

後日、高田にある寺院の境内に足を踏み入れて驚くこととなる。聖徳寺本堂（1967年築）は、寿量院本堂と瓜二つであった。両寺とも真言宗豊山派であるという共通点はあるものの、このような普請が行われた経緯に着目し、その後、昭和中期に建設された寺院本堂に焦点を当てることとなった。

旧水戸街道を進んでいた時、中新宿のとてもモダンな本堂（1968年築）が目にとまり、立ち寄ったことが行念寺との出会いであった。ご住職のご母堂より、大手ゼネコンの若手が建築に関わっていたことを伺い、改めてお尋ねしたい旨ご住職への伝言を依頼した。

このように少しずつ、この時代に建てられた本堂調査を実施するための下地が用意されてきた。建てられてから50年ほど経過すると、多くの建物は耐震性の不足や老朽化を理由に建て替えの対象となることが多い。長年地域で親しまれ、生活を支えてきた寺院建築が伝える豊かな歴史を、改めて探ってみたくなり、本調査にとりくむこととした。

第二次世界大戦後の柏市域の変化

これらの本堂が建てられた頃の柏を、振り返ってみたい。柏市に所在した軍用地は、敗戦により日本軍が解体された1945年以降、住宅地として開発されたり学校や工場用地へ転換された。昭和30年代に入ると、農地や山は造成されて大型集合住宅地の開発が進められ、荒工山・光ヶ丘・豊四季台



柏市民文化会館 1972



柏市立図書館 1975

団地が完成、順次入居が開始され、柏市の人口急増へとつながる。道路が敷設され、公共施設の増設や、鉄筋コンクリート造校舎の新築、学校の新設が行われた。同時に市役所・町役場の建て替え、文化会館・図書館・体育館などの建設が見られ、現代的な都市機能が整えられていった。

柏駅前では、1955年12月の大火を機に、市街地不燃化計画が推進されて、防火帯となる耐火建築からなる駅前商店街が実現されたのが、柏市街地の現代化の先駆けとなった。なお、この至近の長全寺が比較的早い時期となる1966年に、本堂を鉄筋コンクリート造で再建している。

1955年の手賀村と風早村との合併により沼南村が誕生してから10年が経ち、新たな役場を建設するのにあたって酒巻亨建築設計事務所に設計が委託された。プレストレストコンクリート梁の最新技術を採用し、石川組が施工にあたった庁舎は1966年に完成した(注4)。

千葉県下では、大多喜町役場(今井兼次設計/1959)の建築が注目されていた時期であり、同時代の作品として類似点が見られる。

1970年代には、東口には全国初となる自動車と歩行者を上下に分離するペDESTリアンデッキ「ダブルデッキ」が造られ、1973年にそごうデパートと西口の高島屋デパートが開店している。

このような市内の環境の変化に伴い、伝統的な建築も姿を変えてきた。従来の農家型を基本とする住宅は現代化され、学校を含む公共建築も大型の鉄筋コンクリート造へと建て替えられていった。

このような社会的背景が大きくなるとなると、寺院建築にも変化が及んできた。市街地から離れた場所でこの時期に本堂が再建された背景として、団地の開発に伴い土地を手放したことにより工事の予算を確保できたことがあり、この傾向は神社にも見られる。1964年に開催された東京オリンピック後、余剰な建築材料が市場に出回っていたこともこの勢いを後押しした。東葛印旛大師講のつきあいを通して、宗教や宗派を超えて互いの境内や施設に関する情報が得られることも、大きな影響をもたらしたと思われる。

新たな建築様式の展開と、今までの重厚で堂内がほの暗い本堂からの脱却が試みられたことが、昭和中期を象徴する建築作品として柏に出現したのである。本報告書で焦点を当てる1966年から1972年の間に竣工した5棟の寺院本堂は、まさにこのような社会状況の変化を体現する。

注4 『沼南町史 第1巻』沼南町、1979



大須観音 1970



燈明寺別堂 昭和初期、1973改造

現代建築のある市内寺院境内の分布調査対象一覧

所在地	宗派	山号 院号	寺号 名称	建物	構造	屋根形式
柏	曹洞宗	戸張山	長全寺	本堂	RC造	入母屋造
				山門	RC造	入母屋造
				鐘楼	RC造	切妻造
				金毘羅宮	木造	寄棟造
				手水舎	木造	切妻造
				飛雲閣	RC造	寄棟造
高田	真言宗 豊山派	正覚山 地藏院	聖徳寺	本堂	RC造	陸屋根
				庫裡	木造	切妻造
高田	浄土真宗 東本願寺派		満徳寺	本堂	RC造 2階建	陸屋根
				庫裡	木造	入母屋造
花野井	曹洞宗	花井山 大洞院	大洞院	本堂	木造	入母屋造
				弁天堂	木造	入母屋造妻入 唐破風向拝付
花野井	真言宗 豊山派	大悲山	長泉寺	本堂	木造	入母屋造 向拝付
				山門	木造	切妻造
				鐘楼	木造	入母屋造
若柴	真言宗 豊山派	東光山 観音院	長覚寺 (若柴観音)	本堂	木造	寄棟造
				観音堂	木造	入母屋造
				稲荷社	石造物 木造覆屋	—
				稲荷社鳥居	石造	—
				手水舎	木造	切妻造
				手水鉢	石造物	—
				弁財天	石造物	—
戸張	真言宗 豊山派	月沼山	正光寺	本堂	RC造	陸屋根
豊四季	浄土真宗 本願寺派	小金山	正満寺	本堂	RC造 2階建	入母屋造
				会館	木造	入母屋造
				客殿庫裡	木造	入母屋造
				山門	木造	切妻造
豊四季	浄土真宗 本願寺派	浄光山	徳法寺	本堂・ 庫裡	木造	入母屋造
中新宿	浄土宗	金龍山 不退院	行念寺	本堂	RC造	陸屋根
				庫裡	木造	宝形造

個別調査の対象とした建物をゴシック体で示す。

(2023年12月実施)

屋根葺材	建築時期			特徴
	和暦	西暦	根拠	
棧瓦葺	昭和41	1966	扁額 本堂庫院落成	境内を昭和40年代に再興
棧瓦葺	昭和49	1974	『柏の仏像』	
棧瓦葺		不明		
棧瓦葺	昭和31	1956		
棧瓦葺		不明		
金属板葺		1994		
—	昭和42	1967	本殿庫裡新築記念（石碑）	須藤十郎設計 椎名建設施工
棧瓦葺	昭和43	1968	本殿庫裡新築記念（石碑）	須藤十郎設計 椎名建設施工
—	昭和45 昭和63増築	1970 1988増築	設計図面	竹澤古典建築設計事務所
銅板葺	平成10	1998		竹澤古典建築設計事務所
銅板葺	平成4	1992	花野井大洞院本堂建設記念碑	
銅板葺	元治元	1864	パンフレット	
銅板葺	昭和55	1980	本堂庫裡新築記念碑 及び 落慶記念 石碑	本堂棟梁 松丸重雄 庫裡棟梁 松丸文男
棧瓦葺	昭和55	1980	山門高上げ塀建築	
棧瓦葺		不明		
棧瓦葺		不明		
棧瓦葺	寛政元 昭和30改築	1789 1955	観音堂改築記念碑	軸部と縁廻りは銅板巻き 昭和48 観音堂前天水鉢
—	昭和28	1953		陰刻
—	昭和40	1965	稲荷神社烏居建設寄贈者芳名	同時に稲荷像を製作 陰刻あり
棧瓦葺		不明		軒唐草瓦に刻印あり
—	安永3	1772	陰刻	
—	寛保2	1742	陰刻	
—	昭和41	1966	石碑	須藤十郎設計 藤原工務店施工
本瓦葺	昭和37（扁額） 平成20に改修	1962	本堂扁額 金属プレート	
棧瓦葺	平成17	2005	金属プレート	
棧瓦葺	昭和51	1976	石碑	きくたや建築研究所設計
本瓦葺	平成3	1991	金属プレート	青木国工務店
棧瓦葺		不明		住宅風の建物 妻は塗りごめ
—	昭和43	1968	設計図	高山慎建築設計 清水建設施工
鉄板葺				

所在地	宗派	山号 院号	寺号 名称	建物	構造	屋根形式
名戸ヶ谷	臨濟宗 大徳寺派	増尾山	少林寺	本堂	木造	寄棟造
				門柱	石造	—
名戸ヶ谷	真言宗 豊山派	瑞雲山 奨覚院	法林寺	本堂	RC造 2階建 軒廻り木造 正面にセガイ	入母屋造
				山門	木造	切妻造
				苦抜門	木造	切妻造
増尾	日蓮宗	慶長山	妙蓮寺	本堂	RC造 向拝付	寄棟造
				門	木造	切妻造
				鐘楼堂	木造	入母屋造
増尾	真言宗 豊山派	医王山 安養院	萬福寺	本堂	木造 唐破風向拝付	入母屋造
				山門	木造	切妻造
				阿弥陀堂	木造	入母屋造
藤心	曹洞宗	藤心山 延命院	慈本寺	本堂	RC造 2階建	当初陸屋根 入母屋造
藤心	真言宗 豊山派	安養山 誓心院	宗寿寺	本堂	RC造 向拝付	方形造
逆井	真言宗 豊山派	安樂山 誓光院	観音寺	本堂	RC造 向拝・軒廻り木造	入母屋造妻入 唐破風向拝付
大井	天台宗	教永山 積善院	福満寺	本堂	木造 縁までRC造	入母屋造
				観音堂	木造	寄棟造
				鐘楼堂 (鐘楼門)	木造	寄棟造
大井	日蓮宗	長国山	妙照寺	本堂	木造	入母屋造
				客殿	木造	切妻造
				山門	木造	切妻造
				鐘楼	木造	切妻造
塚崎	真言宗 豊山派	無量山 寿量院	寿量院 (長福寺)	本堂	RC造	陸屋根
				庫裡	木造	入母屋造・ 切妻造
大島田	真言宗 豊山派	普門山 遍照院	泉蔵寺	本堂	RC造 2階建	方形造

屋根葺材	建築時期			特徴
	和暦	西暦	根拠	
瓦型鉄板葺		不明		100年前に増尾字本郷より移築 (聞き取り)
—	大正15	1926		本堂移築寺か
銅板葺	昭和49	1974	大師尊像石碑	正面階段を左右に振り分け 縁は那智黒石敷き
本瓦葺	本堂と同時期か			
棧瓦葺	代官所の門を移築			
本瓦葺 大棟に鴟尾		不明		
本瓦葺	昭和57	1982	棟札 (聞き取り)	
本瓦葺		不明		
銅板葺	平成3か	1991	修行大師像銘	向拝廻りの彫刻 石造スロープ後設
銅板葺	平成7 山門修復再建	1995		並木工務店
銅板葺		不明		向拝の獅子頭彫刻
銅板葺	昭和50	1975	本堂庫裡落慶記念供養 塔	請負施工 泉建設 (松戸市) 後年現代建築に屋根をかけた (寿量院聞き取り)
棧瓦葺	昭和47	1972	本堂落慶供養記念碑	
銅板葺	昭和42	1967	『柏の仏像』 観音寺HP	向拝廻りの彫刻 本堂賽銭箱は昭和53
銅板葺	昭和57	1982		
	江戸時代			
銅板葺	享保14 昭和43梵鐘新鋳 昭和47屋根葺替	1729	石碑	
棧瓦葺	昭和45	1970	石碑	
棧瓦葺	昭和56	1981	石碑	
棧瓦葺	寛政8	1796	棟札 (沼南町史)	現存せず 2023建替
棧瓦葺	延享年間	1744-47	沼南町史	現存せず 2022建替
—	昭和45	1970	本殿客殿庫裡新築記念 (石碑)	須藤十郎設計 椎名建設施工
棧瓦葺				須藤十郎設計 椎名建設施工
銅板葺	昭和50か	1975	石プレート	壁タイル張り 縁は那智黒石敷き 逆井観音寺に倣い、近年方形造 となる

1966

正光寺 (しょうこうじ)
所在地： 柏市戸張 1804-1
宗派： 真言宗豊山派
本堂： 昭和 41 年 (1966) 築
設計者： 須藤十郎
施工者： 藤原工務店

1972

宗寿寺 (そうじゅじ)
所在地： 柏市藤心 305
宗派： 真言宗豊山派
本堂： 昭和 47 年 (1972) 築
設計者： 榎本建築設計事務所
施工者： 椎名建設株式会社

1967

聖徳寺 (しょうとくじ)
所在地： 柏市柏市高田 497
宗派： 真言宗豊山派
本堂： 昭和 42 年 (1967) 築
設計者： 須藤十郎
施工者： 椎名弘康 (椎名建設)

1968

行念寺 (ぎょうねんじ)
所在地： 柏市中新宿 1-6-3
宗派： 浄土宗
本堂： 昭和 43 (1968) 年築
設計者： 高山慎建築設計
施工者： 清水建設

1970

寿量院 (じゅりょういん)
所在地： 柏市塚崎 815
宗派： 真言宗豊山派
本堂： 昭和 45 年 (1970) 築
設計者： 須藤十郎建築設計事務所
施工者： 椎名建設株式会社



宗寿寺



宗寿寺 堂内



行念寺



行念寺 堂内

分布調査を通して、5カ寺の本堂を選び出した。

- 新たな本堂の姿を追求した須藤十郎による設計
 正光寺、聖徳寺、寿量院
- 伝統建築の外観を踏襲した宗寿寺
- モダニズムの行念寺



正光寺



正光寺 堂内



聖徳寺



聖徳寺 堂内



寿量院



寿量院 堂内

鉄筋コンクリート造の現代寺院建築



長全寺 伝統式



正満寺 伝統式 本堂機能は上階にある



観音寺 伝統式 RC造の躯体に、木造の向拝と軒廻り



泉蔵寺 近代式 本堂機能は上階にある



妙蓮寺 伝統式



法林寺 近代式 本堂機能は上階にある



慈本寺 近代式→伝統式 後年和風の屋根に改修



満徳寺 近代式 本堂機能は上階にある

寺院に求められる機能への対応

本堂に耐火性、耐震性が求められるのはもとより、時代につれ境内にも変化が見られる。

各地の寺院建築を見学して気づいたことに、本堂を地上より高く持ち上げて、本堂の下層に集会の場や寺務所の機能を設けた事例が散見されることである。集会の場として、別棟の会館が建てられた寺もある。限られた境内地の中で、本堂以外に集会できる大空間を設けるために、集会所の上に本堂を持ち上げる改造もある。

・後年本堂を持ち上げる例

燈明寺（江戸川区） 既存の木造別堂を新築された下層の上に乗せる。

成田山川越別院（川越市） 既存の木造本堂を新築された下層の上に乗せる。

清雄寺（隅田区） 移築された木造本堂を新築された下層の上に乗せる。

・当初から本堂の内外陣を上層に設ける例

増上寺大殿本堂（港区）1974 下層に檀信徒控え室、地下集会室は宝物展示室に改修

大須観音（名古屋市中区）1975 1階はホール兼展示場

両者とも戦災により焼失した本堂を鉄筋コンクリート造で再建

柏市では、本堂機能を上層に設けた例に、正満寺・泉蔵寺・法林寺が見られる。特に満徳寺では、当初から本堂の正面出入口を上層に設けながら、さらに後年正面に増築することで集会室を設け、上層の外陣を拡大している。このように柏市内の寺院本堂のあり方にも、社会の動きが反映されていることがわかる。

本堂とは別の集会の場が設けられたり、駐車場が境内あるいは近い場所に増設されるようになっていく。檀家以外の共同墓地の運営をしていけば、境内の土地利用にも変化が生じ、駐車場をさらに広くとることが必要となる。

建物内部については、椅子座を取り入れているところが多く見られる。空調設備として、冬は灯油ストーブ、夏は後設された冷房設備を使用する。また、ほとんどの本堂に沓脱ぎをして入るが、例えば正光寺では、人数の多い法要に対応しやすいように増築部の部屋では屋外から下足のまま入って参列できるようされている。

柏の現代寺院建築調査

今回の調査を始めるのにあたって、柏市内の寺院で鉄筋コンクリート造への建て替えが行われた可能性のある寺院境内を回り、どのような建築群によって構成されているのか、本調査の背景として把握しようと試みた。対象とした寺院を一覧表に示し、それぞれの概略を p14-17 に記す。

前述の『コンクリート造の寺院建築』に見る分類に倣い、柏の昭和中期以降に建設された本堂を、大きく鉄筋コンクリート造（伝統式・近代式）と木造（伝統式）に分けて、次章以降の個別事例の背景として概説する。横山は「伝統式」・「インド式」・「近代式」の3つに分けているが、柏市に「インド式」は1件しか見出されていないことから、「近代式」に含める。

木造伝統式の現代寺院建築



長泉寺



西光院



福満寺



萬福寺



大洞院



徳法寺



長覚寺

・鉄筋コンクリート造／伝統式

鉄筋コンクリート造になると柱が太くなることから、印象としては古風になる。また、組物や木鼻などの比較的細かい部材の表現は多くの建物において簡略化されている。

[平屋]

- 長全寺 中央間を大きくとる五間堂。入母屋造、棧瓦葺。
 観音寺 入母屋造、妻入（正面に妻を向ける）、木造の唐破風付向拝に個性的な彫刻を施す。
 妙蓮寺 寄棟造、本瓦葺、大棟に鴟尾。一軒（化粧垂木は地垂木のみからなる）の化粧垂木。縁に高欄がない。
 宗寿寺 方形造、棧瓦葺、頂上に宝珠。意匠を削ぎ落とした簡潔な表現。

[2階建]

下層に集会室等を入れる配置するために、本堂が2階建になる。下層へは本堂正面の階段下にある出入口から入る。上階の縁には高欄が欠かせない。

- 正満寺 組物や木鼻などの装飾的要素は用いない、あるいは簡略化される傾向が見られる。そのような背景の中で正満寺では向拝の組物、木鼻、手挟みをかたちづくり、独自の絵様を彫り出したかのように見える方法で施している。軒廻りには二軒の化粧垂木。入母屋造、本瓦葺、妻飾りは木連格子。

・鉄筋コンクリート造／近代式

外観は従来の寺院の形式から飛躍しながら、堂内に内陣・外陣の空間の伝統を保つ、鉄筋コンクリート造とすることで得られた新しいかたちの本堂。

[平屋]

- 正光寺・聖徳寺・寿量院 同じ設計者須藤十郎による鉄筋コンクリート造の本堂。
 行念寺 柱と壁を斜めに立て、小割りのガラス窓を壁面の意匠とし、天窓からも採光するモダニズム建築。



萬福寺本堂向拝



観音寺本堂向拝

慈本寺 近代式寺院として建設されながら、後年伝統的な屋根形式に改造されている。改造前の上空写真を見ると四角い陸屋根の本堂の上に、近くの寿量院に見るようなペントハウス（明かり取りか）が屋上にある。

[2 階建]

鉄筋コンクリート造／伝統式と同様の条件で、上層に本堂内外陣を設ける。

泉蔵寺 方形造、銅板葺、軒は水平のボード張り。

法林寺 正面階段を左右に振り分けることにより、下階に入りやすくなっている。軒廻りには二軒ふたのき（化粧垂木は地垂木と飛檐垂木からなる）の化粧垂木。入母屋造、銅板葺、妻飾りは虹梁、蟄股。

満徳寺 アジアからの仏教伝来を示唆する意匠を正面に用いた本堂で、内外陣を上階に設ける。後年前面に増築し、外陣を拡張しながら、正面の意匠を踏襲する。

・木造／伝統式

伝統的な木造建築とし、特に現代的な意匠は用いない。

長泉寺 五間堂、入母屋造、銅板葺。

福満寺 五間堂、入母屋造、銅板葺。

大洞院 五間堂、入母屋造、銅板葺。向拝は唐破風付。

長覚寺 五間堂、寄棟造、棧瓦葺。

西光院 五間堂、入母屋造、本瓦葺。

中央間に取り付く向拝は両脇に柱を2本ずつ立てる。二手先の組物で軒を支える。

萬福寺 五間堂、入母屋造、銅板葺。向拝は唐破風付。向拝の彫刻が特に目を引く。

鉄筋コンクリート造の観音寺本堂の木造向拝の彫刻と似ている。

徳法寺 他と異なり住宅型建築に本堂と庫裡を併設する形式である。

入母屋造、棧瓦葺、妻飾りが全面漆喰塗。

建築家須藤十郎

柏市内の現代寺院建築を調べ始めた時点では、それぞれの設計者に関する情報を持ち合わせていなかったものの、境内の石造物の陰刻を読み、各寺院のご住職のお話をお伺いするにつれて、建築家須藤十郎の存在を強く意識するようになった。というのは、本報告書でとりあげる本堂5棟のうち、正光寺・聖徳寺・寿量院の3棟の設計がこの建築家によることがわかり、1960年代から1970年代にかけて、宗教建築のみならず柏市域を含む多方面に影響を及ぼしていたことが判明したからである。

2022年当時、当建築家が立ち上げた株式会社須藤建築事務所は柏駅近くにあり、問い合わせたところ、事務所を引き継いだご子息須藤英華氏のご快諾を得て、現地でお目にかかることができた。先にご本人の経歴をお尋ねした。

英華氏は昭和1948年生まれで、我孫子市立我孫子第四小学校に通った。この木造校舎への増築を十郎が設計し、T字型に3教室の並ぶ形式だった(注5)。1973年に早稲田大学建築学科松井源吾研究室で大学院を卒業した後、1981年まで菊竹清訓建築設計事務所に勤務し、東光園別館の設計監理を担当した。その後独立し、仲間が近くにいたこともあり、ひとりで4、5年マンションの一室で設計事務所を営んだ。須藤建築設計事務所に勤務するようになったのはその後のことである。

須藤十郎(1915-1991)は、我孫子市柴崎の天王台出身で、農家の次男であった。神戸出身の妻淳子(1922-2003)は、第二次世界大戦後に東京に移転しており、十郎とは1946年に結婚した。建築設計事務所を手伝い、後述する十郎によるエーデル幼稚園の創立後、園長資格を取り園長に就任した。

十郎の建築を専攻するようになるまでの教育を下記する。(年は推定を含む。)

- 1930 県立東葛飾中学校(現県立東葛飾高等学校)に進学、3期生。(注6)
- 1933 野田醤油に就職、数年勤めた。本家先々代の兄弟で取手の教育者であった伯父に、東京帝国大学に行くのであるなら支援すると言われたがかなわず。
- 1937 建築があきらめきれず、現福井大学前身の福井高等工業学校に入学して1年在籍。(注7)
- 1938 次の年に改めて早稲田大学に遅れて入学、地元から盛大に送り出された。松井源吾(佐渡出身、1920-1996)、安東勝男(1917-1988)と同期。戦時中であったために繰り上げ卒業している。
- 1941 卒業 戦時中にはスマトラに行って兵舎を造った。

須藤十郎建築設計事務所は、当初我孫子市白山の自宅で設立し、4、5年経って柏に移転し、最盛期には15人の所員がいた。2022年に事務所を創設地の我孫子に戻した(注8)。

設計活動

事務所設立当時は建築設計事務所が少なく、東葛地方の行政や県の仕事を多く担当したという。聞き取りを通して挙げられた作品以外にも補足し、下記に建物種別に整理した。

ボイドスラブとも呼ばれる中空スラブは、十郎と早稲田大学で同期であった松井源吾教授が1962年より使用するようになった工法で、コンクリートのスラブに円筒型の型枠を埋め込むことで強度を確保しながら重量を軽減でき、小梁を不要とすることから開放的な室内空間が得られる(注9)。資料から柏市立第六小学校及び手賀中学校校舎に使用されていることが確認できた。

・教育施設

※ RC造=鉄筋コンクリート造

- 1953 めばえ幼稚園 我孫子キリスト教会附属教会学校として開園
- 1955- 我孫子第四小学校増築 (注5)
- 1955- 我孫子第一小学校講堂 (注5)
- 1962 我孫子中学校 RC造 すべての教室に同様に日が当たる円弧を描く平面(注10)
- 1963 布佐中学校 木造 (注11)
- 1962 柏第六小学校 RC造 中空スラブを使用、円形校舎もあった
- 1964 柏第一小学校第2校舎 RC造
- 1969 手賀中学校校舎 RC造 中空スラブを使用
- 1976 エーデル幼稚園

・宗教建築

- 1966 正光寺本堂・庫裡 以下いずれも本堂はRC造、庫裡は木造
- 1967 聖徳寺本堂・庫裡
- 1970 寿量院本堂・庫裡

・その他

1982年よりデベロッパーへの協力に関わる。NECの柏市利根川河川敷への誘致に協力したことで繋がりができて、会社からの依頼に応じ、柏や松戸の地主たちと交渉し、社員寮を600から700室設計した。当時企業は社員として「金の卵」への期待が大きく、独身寮の設置に熱心だった。日本電気株式会社我孫子事業場は、1982年に開設された。

1993年には、柏市で須藤建築事務所の入っているビルを設計した。

我孫子市での活動

・エーデル幼稚園

昭和50年代に人口が増加した時期に幼児数も急増したが、我孫子には幼児教育の場がなかったことから、市からの要請を受けて、1976年に学校認可をとって法人を設立。幼稚園を設計、建設。淳子が園長資格をとって就任した。この幼稚園では幼児教育に主眼をおいており、国が進めるこども園とは方針が異なる。

・ロータリクラブ

柏ロータリークラブの勧めにより我孫子ロータリークラブの設立に尽力し、チャーターメンバーとして活動した。実績のひとつとして、1971年に天王台駅ができ、宅地開発が進んだことがあげられる（注12）。

十郎は、設計活動以外にも多趣味であった。我孫子にも来ていたバーナード・リーチに傾倒し陶芸を手がけ、演劇方面では我孫子在住であった劇団文化座を設立した女優佐々木愛を応援した。我孫子にはオペラ劇団もあり、両者をあわせた企画をすることに関心があった。

また、戦時中の経験のためか海外にはあまり興味がなく、船や飛行機に乗るのが好きでなかった。バンカラな感じであったが本を多く読んだという。

好きな建築家は、エーロ・サーリネンと今井兼次であったという話と実現された作品群より、十郎が建築設計を通して理想とする、モダンであたたかみのあるロマンティシズムが感じられるようである。

注5 校舎について：我孫子町報、1955年10月号

注6 1期生に松崎良太郎がいた。

注7 『福井大学工学部五十年史』財界評論新社1974に柏市で須藤建築事務所を営むことが記されている。

注8 須藤十郎建築設計事務所の名称を用いていた時期もあることが図面類に確認できる。

注9 松井源吾編著『中空スラブの設計』彰国社、1974

注10 広報あびこ、1961年11月16日号

注11 広報あびこ、1963年8月1日号

注12 1965年設立、十郎は1974-1975に第9代会長。我孫子ロータリークラブサイトによる。

須藤英華氏への聞き取り

実施日：2022年3月17日 柏市内須藤建築事務所にて

聞き取り者：金出ミチル（記録）、江藤隆博

須藤十郎設計による柏市内の現役校舎



柏市立柏第六小学校 1962



柏市立柏第一小学校 第2校舎 1964



柏市立手賀中学校 1969

第1章 正光寺本堂

所在地： 千葉県柏市戸張 1804-1

宗派： 真言宗豊山派

竣工： 昭和 41 年（1966）

設計： 須藤十郎

施工： 藤原工務店

背景

旧戸張村の根郷に位置する月沼山正光寺は、江戸時代には鱒ヶ崎東福寺（流山市）の門徒寺で、不動明王を本尊とする（注 1-1）。現在境内に本堂以外の建物はなく、墓地に立つ石造の地蔵には正徳 5 年（1715）、本堂前の手水鉢には享保 18 年（1733）の陰刻が見られ、当地の歴史が裏づけられる。

本堂と東隣の庫裡の建てられた範囲は、地面を掘り込んで平らにされたことが、両側面と背面の周囲三方が急斜面に囲まれていることからうかがえる。本堂の西及び北側の一段高い土地が墓地になっており、江戸時代の銘のある墓石が多数見られる。墓地への上り口となる階段のある擁壁は、昭和 55 年（1980）に造られたことが石碑よりわかり、この頃以降に墓地内の整備も行われたようだ。

本堂は、斜めに立ち上がる壁と躯体から差し出された陸屋根に特徴づけられる鉄筋コンクリート造からなり、南面する。外部は壁面と屋根を青みがかった薄灰色、この下に入る構造を象牙色に塗り分ける。外壁塗装層の下にモルタル塗刷毛引き仕上げが見られることから、当初はセメント色のままであったと思われる。

境内にある石碑より、本堂建て替えの経緯と工事の関係者名が判明した。正光寺本堂と庫裡の設計を担当した建築家須藤十郎は、正光寺の後、続けて近隣の真言宗豊山派寺院聖徳寺と寿量院の本堂を手掛けている。

現本堂と同時に建てられ、本堂に渡廊下で接続していた木造の庫裡は取り壊され、更地になっている。庫裡の規模は、境内にある石碑の記述より、20 坪であったことがわかる。

平面

本堂の平面は十字型として計画され、中央の交叉部を外陣とし、この前に玄関を突き出す。左右の張り出し部それぞれを 10 畳間の書院座敷とし、ここでは便宜的にそれぞれを西室、東室と呼ぶことにする。外陣の奥を内陣とし、背面壁に祭壇を設ける。本堂の手前右側に、集会室が増築されている。

外部

外回りの外壁は、上方を垂直より内側に 10 度傾けて立ち、外壁の傍は同じく 10 度の傾きで外向きに広がる。壁は 24 から 35 センチととても厚く、断面寸法の大きい柱は、十字型交叉部の四隅にのみ見られることから、壁自体が主要な構造材として扱われているようだ。図面がないので確認できないものの、壁構造には、当時設計者が積極的に用いた中空スラブのような特殊な構造が採用されていることが考えられる。また、傾く外壁と室内の垂直に立つ壁との間に懐ができるので、この中に柱

注 1-1 『柏市史 近世編』柏市、1995（p744）

が立てられている可能性もある。

本堂正面全長には、縁に代わるベランダがあり、この中央の大階段から玄関に向かう。(増築部の床下には東室前にもベランダがあった痕跡が見られることから、当初は左右対称の構成であった。) 玄関両脇の壁面に見られる背広の襟のような形の突出は壁の構造の一部であろう。この奥まった位置に外側に開く両開きの扉が取り付け。後方に向かって緩やかに下がる屋根は、正面では玄関から階段までを覆うように長く差し出されている。側廻りには、工業用の重厚なアルミ製サッシを用いる。

堂内

堂内を圧倒的に印象づけるのが、外陣の天井である。吊り天井の中央に開けられた大きな円形の開口からさらに高い天井へと視線が導かれる。本堂の両側面に高窓があり、当初は天井／屋根面のガラスブロックからも自然光が堂内にふんだんに取り入れられ、堂内の天井と壁に反射された彩光が堂内に回るようになっていた。現在これらの彩光装置はふさがれ、代わりとなる電気照明により同様の効果が得られている。後述する祭壇前の彩光も含め、他の類似する設計の本堂同様、自然光を積極的に取り入れると堂内が非常に暑くなることから、閉鎖されたものと思われる。

外陣 正面出入口からは、直接外陣に入る。開放的な意匠の天井に加え、両脇にある東室と西室との間の建具が取り外されていることから、とても広く感じる。

内陣 内外陣境に結界はなく、内陣の床が外陣より一段高くなっていることで空間の違いがあらわされている。北壁に奥行3尺(900ミリ)の祭壇を設け、祭壇前の下り壁下端は雲型。厨子は祭壇上に据え、須弥壇は祭壇の前に配置する。吊り天井の上から祭壇手前に、自然光が間接的に回る工夫が見られる。

東室・西室 この2室が客殿の役割を果たす。両室とも奥の壁は、斜めの外壁の内側に垂直な壁を立ち上げて造られている。いずれも外陣境は現在開放になっているが、2本溝の敷居と鴨居があるので、引き違いの建具が建て込まれていたことがわかる。

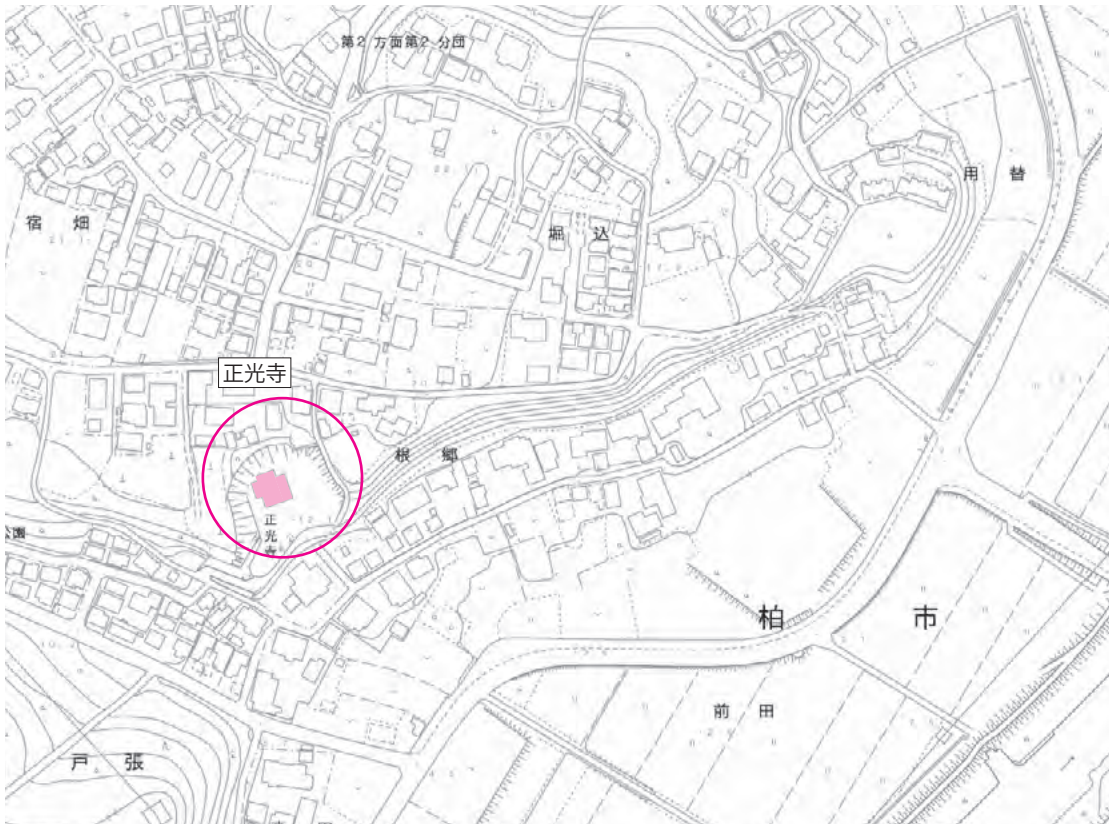
東室では、北壁を浅い踏み込み床のような造作とし、東隅に床柱に見立てたスギ丸太を立て、床奥の北壁には障子戸を入れる。東壁の北寄りには押入、南寄りの襖より入る前室からこの北側の便所に入る。前室の東壁にはかつて庫裡に接続していた渡り廊下への出入口が残る。

前室及び便所の室内東壁上方では、窓開口部が斜めの壁にうがたれている。

西室は、西壁南寄りに間口1間の床を設け、下方を地袋とする。北側の1間は押入。南壁は掃き出し窓、北壁は窓とする。現在ボード張りの天井は、当初は敷目天井であったと思われる。西室の北側に納骨堂が増築されているので、西室北壁開口部の位置と大きさは変更されている可能性がある。

増築部

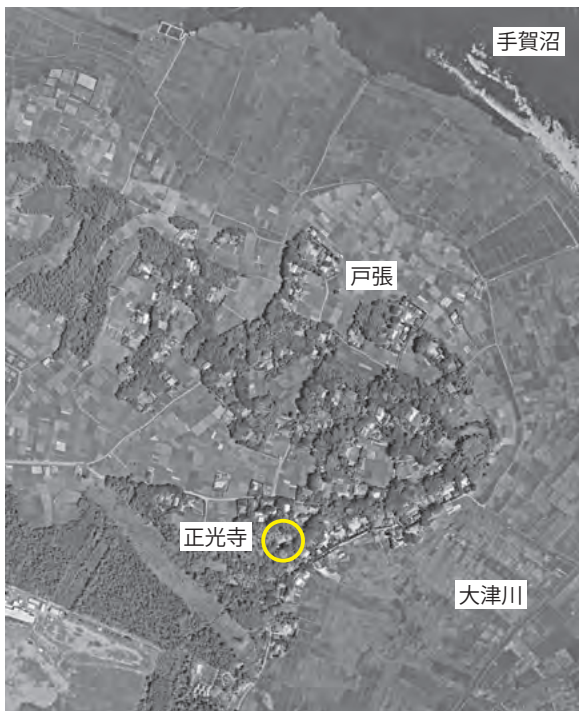
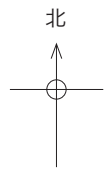
鉄骨造の平屋が、本堂の正面東側に増築されている。床高はベランダに揃えられ、正面と西側のベランダから土足のまま入って利用でき、大人数の法事への対応が可能となった。増築部への出入りがしやすいように、正面には鉄骨造のベランダが設けられ、西側では既存のベランダが手前に延長されている。東壁にはミニキッチンが備え付けられている。増築時期は昭和時代末頃と思われる。本堂への増築と前述の庫裡の解体は、一連の工事として実施されたようである。



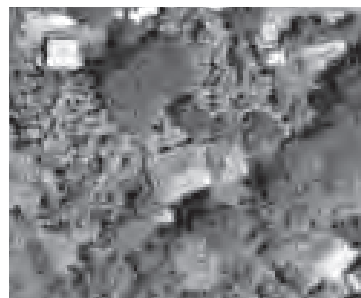
案内図



正光寺 配置図



1961年 空中写真 国土地理院 MKT613-C39-26
現本堂に建て替え前



左図○の周囲を拡大 正光寺の前身建物が見える。
本堂(左)と庫裡(右)



「本堂庫裡建立記念碑」

表面には寄進者の名前が陰刻されている。
裏面の上段を、以下に書き下しする。
下段には工事関係者の名前が連なる。



「裏面」

当寺は不動山にありし不動尊を宝曆二年当所に勧請し茅葺をもつて本堂庫裡を建立し永年に亘りて修理を加え今日に至るも老朽甚しくここに檀信徒一同協議の上寺有財産処分金と檀信徒の寄附金とをもつて維持奉仏のため本堂鉄筋コンクリート平家建庫裡木造トタン葺にして改築永代護持するものなり

昭和四十二年十一月吉日

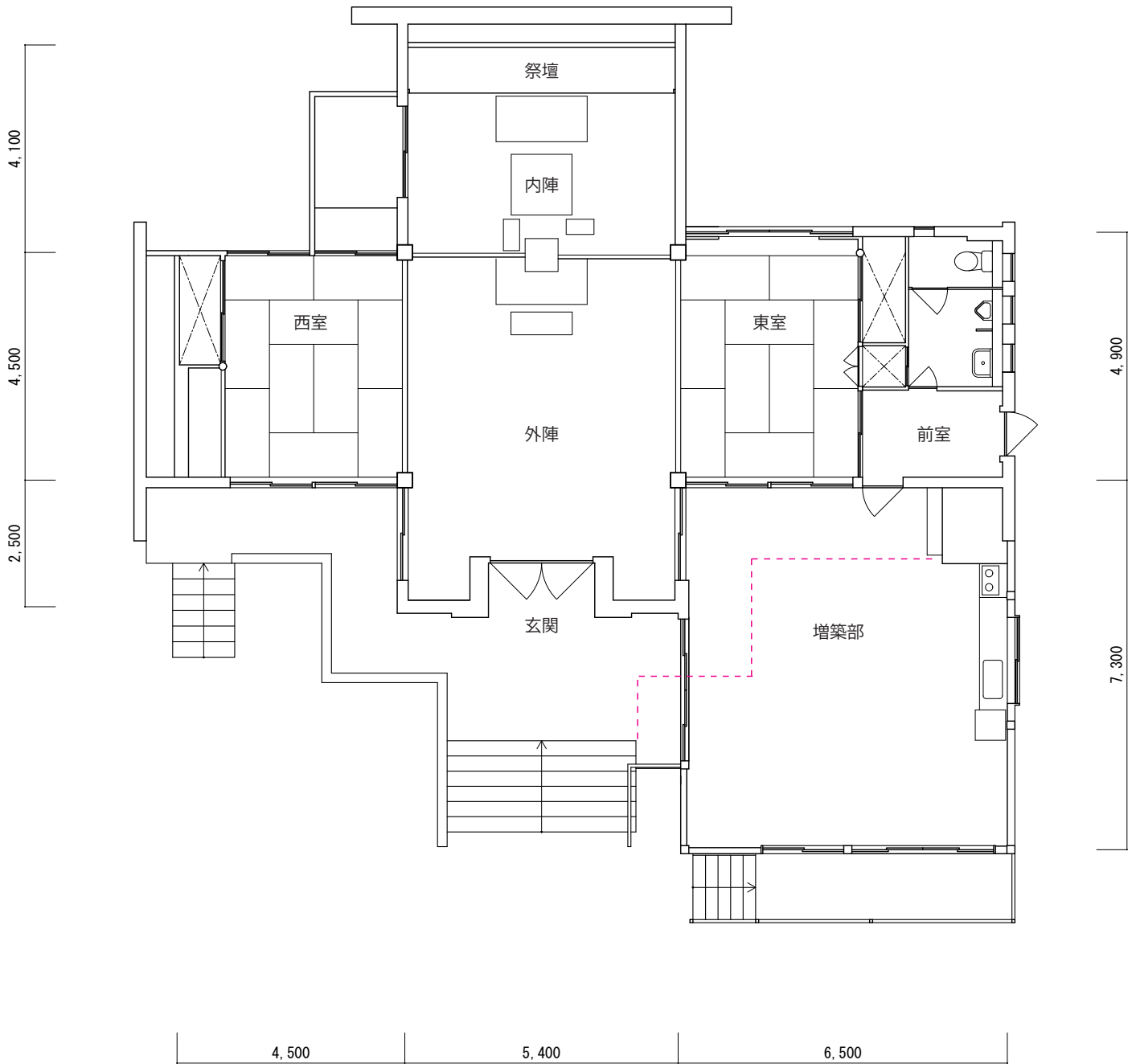
着 工 昭和四十年十二月二十日
上棟式 昭和四十一年二月七日
落慶式 昭和四十一年七月二十八日
本堂坪 三十六坪
庫裡 二十坪
総工費 一千二十五万円也
設計者 須藤十郎
施工者 本堂 藤原工務店
同 庫裡 佐々木建設



昭和五十五年十一月吉日
「道路擁壁」工事竣工記念碑」



画面右から擁壁の上に整備された墓地に至る階段があり、その途中に左図の記念碑がある。階段を覆うように藤棚が造られている。



※ 点線で竣工時のベランダの輪郭を示す。
床下に痕跡が残る。

正光寺本堂平面図
s=1/120



本堂正側面 画面右に庫裡があった。



本堂正面



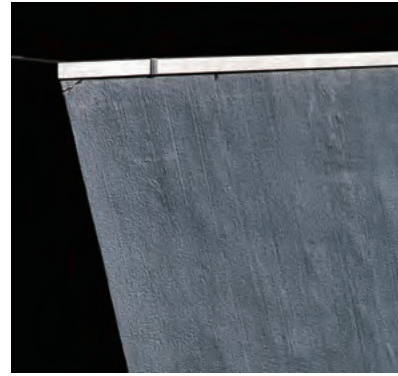
内陣 須弥壇と厨子の上には
雲型の下がり壁



外陣より内陣を見る。



本堂西側面



ペンキ塗された壁面は、当初はモルタル
塗刷毛引き仕上げ



本堂背側面
北西入角（いりすみ）に
納骨堂が増築されている。

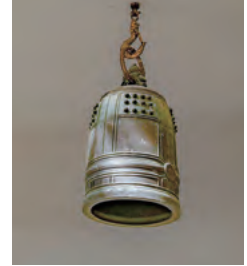
— 10° —
各面とも壁には
10°の傾きが
つけられている



本堂背面



本堂正面



西室前の隅に吊るされた半鐘



本堂正側面

西室



門 2008年建立



扁額



賽銭箱

屋根は後方に向かって緩やかに傾斜する。

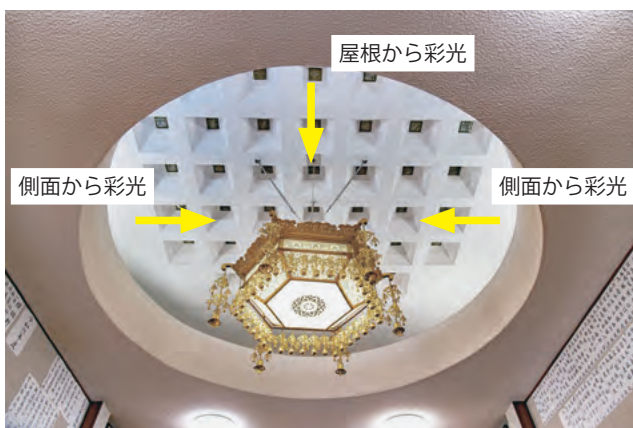
明かり取りの窓は、両側面とも閉鎖されている。



堂内は多数の電気照明器具により、とても明るい。本堂は両側面にある高窓から自然光を取り入れるように、設計されている。天井中央の円形開口部上方にはガラスブロックが嵌め込まれており、屋根面にも明かり取りがあったと考えられる。



正面玄関上方には天井上から彩光が得られるようになっている。



外陣天井と照明器具
上方から彩光が得られるように設計されたものの
ふさがれている。



玄関扉上には彩光の得られる欄間窓（閉鎖されている）

玄関



外陣より西室を見る。



外陣より東室と玄関を見る。



西室を外陣から見る。外陣境には引き違い戸を建て込むようになっている。



西室 床廻りと押入



西室前縁



階段詳細



東室を外陣から見る 外陣境には引き違い戸を建て込める。



東室北側の窓を外から見る。サッシの内側に障子戸を入れる。(現在障子戸はない)



北壁の隅を床柱とし、踏み込み床に見立てる。



東室を背面から見る。



便所 北東隅に柱がある。



便所 東壁は壁の勾配がそのまま室内にあらわれる。



右図の出入口を室内から見る。
斜めの壁に対して垂直に建具を入れる。



前室の外部 庫裡への渡り廊下が接続していた扉と便所窓
上の写真とあわせて見ると、斜めの壁がどのように室内に見えるかわかる。



本堂を東から見る。



当所の外壁が、側廻りの建具とともに、室内に取り込まれている。床下には西室外部同様の縁が残る。

増築部室内 正面と西側の出入口から下足のまま入室、大人数の法要に対応できる。



室内を北西から見る。



正面のベランダからも出入りできる。西面と正面に同じ間口のサッシを入れるために、西面ではベランダが前方に延長された。(↑の範囲)



増築部の床下にはベランダが残る。



増築部全景 南東から見る。



本堂前の手水鉢 享保 18 年（1733）の陰刻がある。



門前の通り沿いには高垣 門柱は昭和 60 年（1985）に建立



小祠



正光寺前の通り



地藏 正徳 5 年（1715）の銘



墓地の一角



六地藏

第2章 聖徳寺本堂

所在地： 千葉県柏市高田 497

宗派： 真言宗豊山派

竣工： 昭和 42 年（1967）

設計： 須藤十郎

施工： 椎名弘康

背景

旧高田村の中上に位置する聖徳寺は、山号を正覚山、院号を地藏院とする真言宗豊山派の寺院で、江戸時代には鱈ヶ崎の東福寺の末寺であった（注2-1）。創立当初は浄土宗であったという。

先代が早く亡くなったことから飯嶋賢壽住職（1949年生まれ）は20歳の時に聖徳寺の住職になった。この当時、延命観音を本尊とする坂東札所第24番雨引山楽法寺（雨引観音）の師匠のもとにいたところ聖徳寺に戻り、以来寺をまもり続けている。

聖徳寺では明治6年（1873）の火災で本堂を焼失しており、我孫子市久寺家の建物を購入、移築して茅葺の仮本堂とした。この時に本尊は焼失をまぬがれて、現本堂に安置されている。一方で、不動尊像は火事でばらばらになってしまい、失われたという。この地域には農家が多く、境内周囲は竹藪だったところ、徐々に境内地を拡大し、今日の規模になった。昔から山門はなく、旧本堂は、参道の突き当たりに立ち、この手前右側に庭園があった。（現在の本堂は、参道の左寄りに立つ。）日常的には、参道に面する阿弥陀院を主に利用している。

本堂

本堂は「ビルマ系」の建物のイメージで、ハスの花に水がたまる様子を表す。庫裡も同時に建て替えられ、境内に立つ石碑「本堂庫裡新築記念碑」にこの経緯が刻まれている。

須藤十郎建築設計事務所に設計を依頼した経緯は聞き伝えていないものの、寿量院の先々代が沼南町の役場に勤めており、当時市内に設計事務所は少なかったことから、沼南町の中学校を設計した建築士に依頼したことも考えられると言われた（注2-2）。聖徳寺本堂が竣工した3年後、寿量院本堂が同じ設計者により建てられており、規模が多少異なるものの、双子の本堂と呼べるほど似ている。両者の詳細について、あわせてp57で取り上げる。

本堂には筋交がなく、屋根の重量に対して柱が細いと感じるものの、2011年の地震時には震度5弱の揺れだったので、ヒビが入るぐらいで済み、補修をしたという。

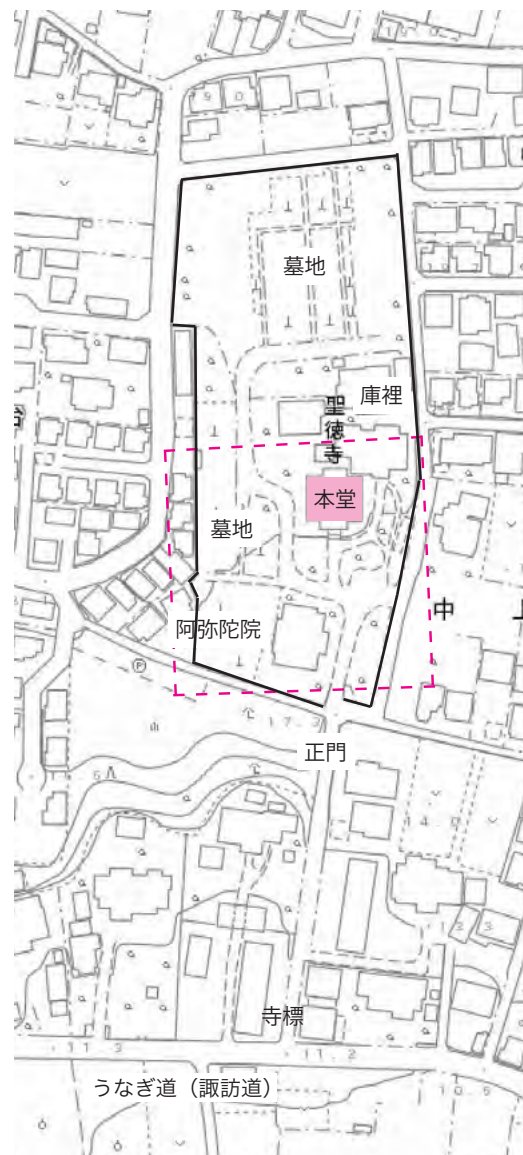
長年使い続けられてきた本堂には、以下の改修が加えられている。当初外陣上方の吹き抜けの周囲には、屋上より彩光が得られるガラス窓があったが、堂内が暑くなるので、本堂竣工時から10-15年後にふさがれた。また、コンクリート打ち放しであった堂内の柱・梁が寒々しく感じたので、壁をクロス貼りにし、柱には木目調の壁紙が貼られている。背面東側への増築により庫裡と接続され、ミニキッチンを利用することで簡単な飲食の準備や配膳が行えるようになっている。

注2-1 『柏市史 近世編』柏市、1995（p745）

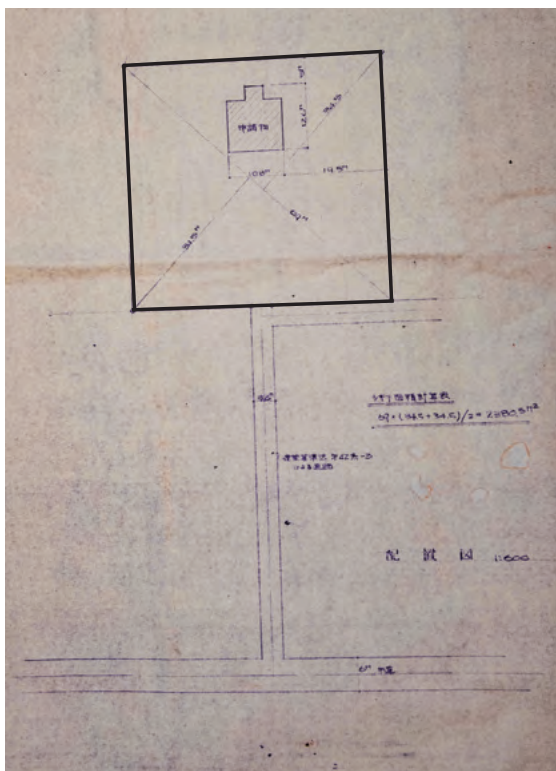
注2-2 柏市立手賀中学校校舎（1969）は、聖徳寺本堂と同じ設計者須藤十郎による（p28）。



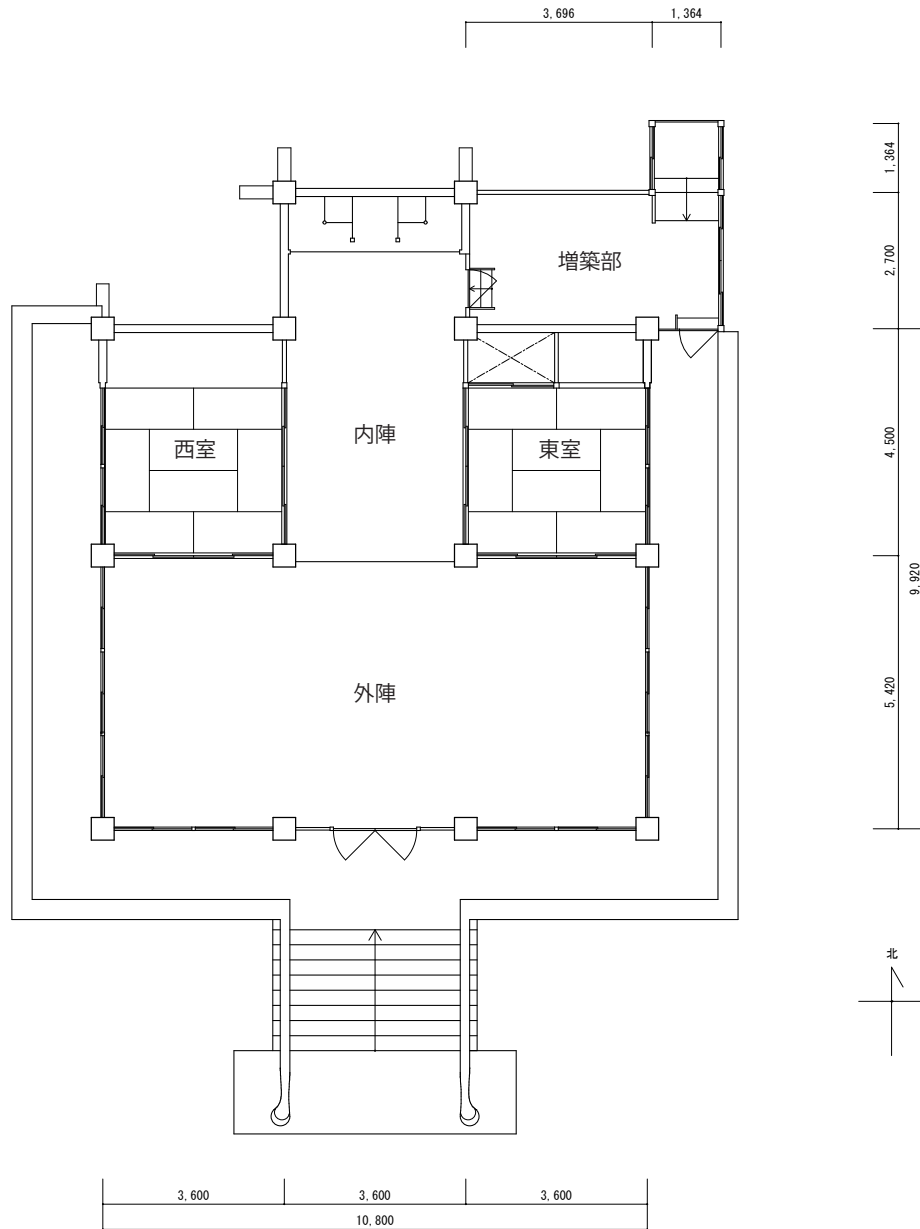
1961年 空中写真 国土地理院MKT613-C38-23
周囲の市街地化はまだ進んでいない。



聖徳寺 配置図 現況 境内を徐々に拡大してきた。
点線で左図の境内輪郭を示す。



聖徳寺 配置図 本堂建設時
図面「聖徳寺改築その他工事」より



※ 平面図は、設計図面綴りより欠損

聖徳寺本堂 現況平面図 s=1/150



聖徳寺 正門



集会に利用される阿弥陀院（1984） 軽量気泡コンクリートパネルを用いて建て、7年に1度、コーキングとペンキ塗を行う維持管理をしている。



表通りの「うなぎ道」に立つ寺標 参道の先に本堂が立つ。



本堂正側面 南東から見る。



本堂西側面 本堂に向かって左手には、檜の木2本の切り株がある。



本堂正面



正面詳細



扁額



正面玄関廻り



外陣から東を見る。床はビニールタイル敷きを絨毯敷きに変更し、10年程前に椅子とテーブルを導入。



外陣西室



玄関 扉は取り替えられている。以前は、寿量院と同じ形式であった。周囲ガラス戸のサッシは当初のまま。

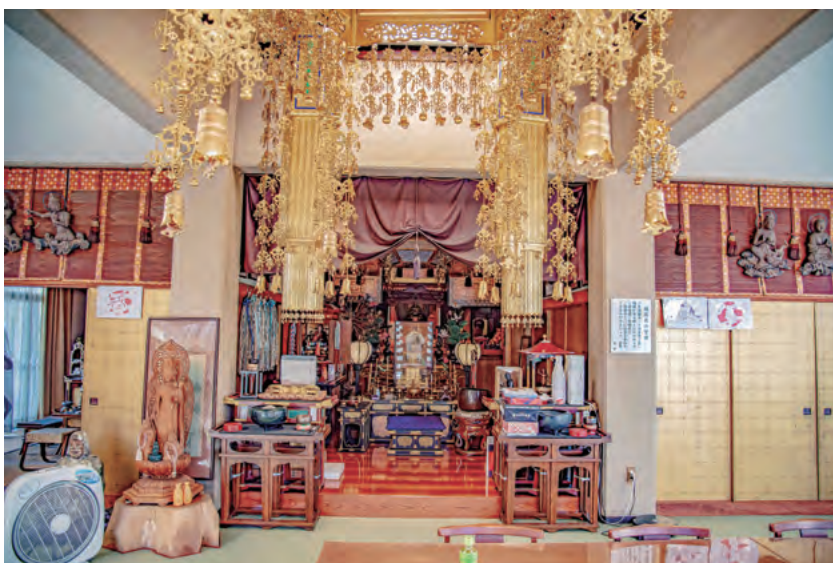


内陣

当初外陣上方の吹き抜けの周囲には、屋上より彩光が得られるガラス窓があったが、堂内が暑くなるので、本堂竣工時から 10-15 年後にふさがれている。



外陣天井



外陣から内陣を見る。

「本堂庫裡新築記念碑」

〔表面〕

建設委員の中に、設計者 須藤十郎、施工者 椎名弘康 の名が見られ、続いて下方3段にわたり、寄付額と芳名が列記されている。

〔裏面〕書き下し

当寺本堂は明治六年（一八七三年）焼失の災に遇い為に庫裏の一隅を以て仮本堂とし爾来八十五星霜庫裡亦荒廢を呈するに及びこれらの再建を企てつつもこれを果さず今日に至るしかるに昭和三十年代後半より柏市の都市化開發進展の惠沢は当山周辺にも及ぶ処となり再興の機運熟し悲願成満の期到来せり。よつて当寺第廿一世飯島賢明僧正と。檀信徒一同と相はかり、想をねり議を尽し、ついに寺有財産の一部処分と檀信徒こぞつての、淨財寄進とを以て総額金一千八拾万円也の資金をととのえ昭和四十一年十一月先づ本堂建立の土を起し翌昭和四十二年七月（一九六七年）鉄筋コンクリート造の近代的本堂の落慶を見、ついで木造瓦葺庫裏の造営に移り、昭和四十三年三月竣工、両々相まつて当山の伽藍はその面目を一新せり。ここに当寺の法燿再び揚々として翻り 吾等檀信徒らの本尊明王の威光さらに、炳平として、耀きを増すこととなれり。歴然として後世に證示し、世々の児孫本尊帰依の至心は、本堂庫裡造営の事蹟を以て、安穩興隆を念じて、やまざるものなり。よく山王をたすけ当山を護持し寺檀相共に、落成慶讚新住晋山の式典の日にちなみ、ここに趣意の存するところ、要を摘んで碑石に誌す。

昭和四十四年二月十五日

兼住職

牛田秀一

聖徳寺新任第廿二世

飯嶋賢壽

聖徳寺総代

飯嶋明治

増田又一郎

飯野仙太郎

田口俊一



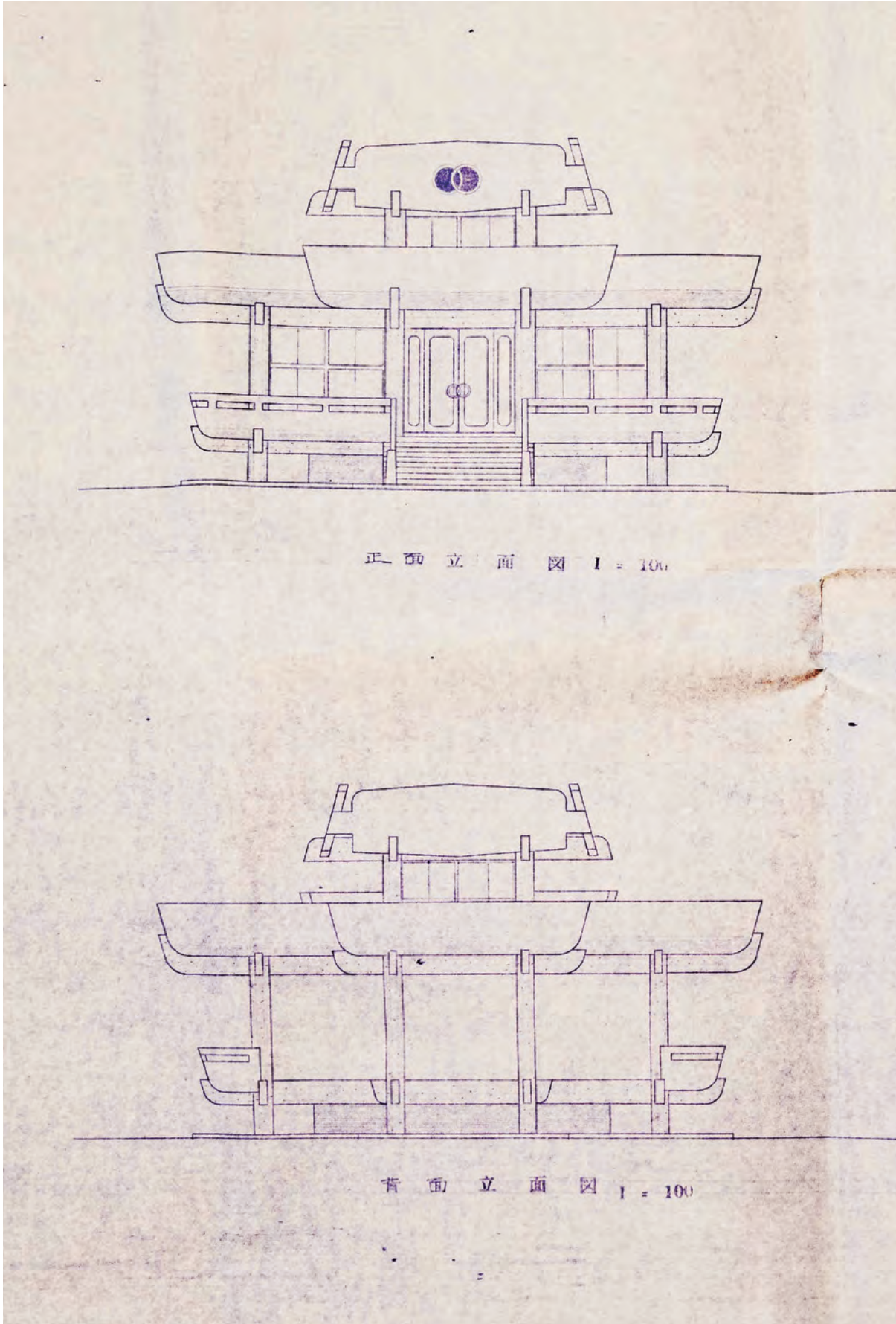
〔裏面左下隅〕

筆者 瀬下喜山

流山市流山三丁目

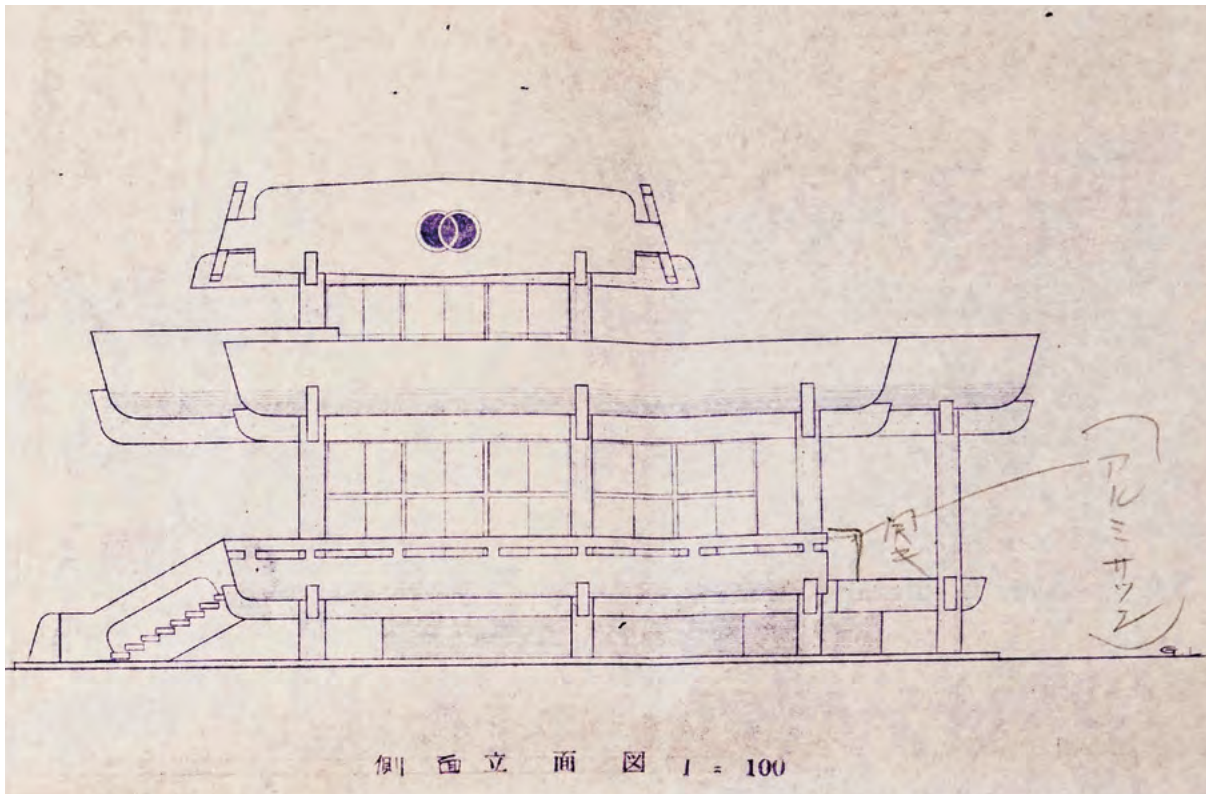
小早川石材店刻

聖徳寺 石碑 「本堂庫裡新築記念碑」
昭和43年（1968）
高さ185cm 幅98cm 厚さ8.5cm
粘板岩製



聖徳寺本堂 正面立面図 (上)
背面立面図 (下)

図面「聖徳寺改築その他工事」 1級建築士 登録 17851号 須藤十郎 聖徳寺所蔵



聖徳寺本堂 側面立面図

事務所名ではなく個人名、年月の記入なし
白焼きの図面 原図 1/100 を縮尺 1/150 で掲載

双子の本堂：聖徳寺と寿量院

同じ建築家須藤十郎の手による2棟の本堂の完成時期は、聖徳寺が1967年、寿量院が1970年と3年しか離れていない。多少規模が異なるものの、共通する考え方を反映して設計されていることから、ここでは両者をあわせて取り上げる。いずれも南に正面を向けて立つ。

外観

屋根の上に巨大なハスの花弁を連想させるコンクリートパネルをのせた白亜の建物は、遠く離れた場所からも際立つ姿をしている。特に高台に位置する寿量院は周囲の田畑の先に、宙より舞い降りたかのように見える。

本堂の正面は3間からなり、聖徳寺は正面と両側面に、寿量院では背面を含めて四周に縁を回す。縁は高欄の代わりに上端が外側に傾く腰壁とし、大きな屋根の軒は縁の端を超えてかかる。軒下から屋根を支える梁が突き出され、この上に上端が外側に傾く屋上面のパラペット（腰壁）が立ち上がり、本堂の特異な外観をかたちづくる。

外陣の明かり取り窓上方には、前述のハスの花—上端が内向きに傾く台形のコンクリート板—が光を取り入れる反射板のようなかたちで設置されている。パラペットとあわせると、まさに蓮華となる。この板とパラペットの傾きは、垂直から15度に揃えられており、各面の中央には豊山派の印である輪違がとりつく。

本堂出入口にあがる階段は、下方の手すり端部が曲線を用いて雫型に納められた独特な造形からなる。これは設計者須藤十郎が好んだ米国の建築家エーロ・サーリネンの作品を思わせる。

正面の階段を上った先の中央間の出入口から堂内に入る。重厚なアルミサッシを黒色に塗装した正面出入口の建具は、中央の2枚を両開き戸、引き手は輪違のかたちとする。正面両脇と側面は掃き出し窓。更新されている寿量院の正面玄関の建具も、当初は聖徳寺に見る形式であった。

建設当初の柱や梁の構造材は、比較的細い幅の板材の木目を表面に見せる、コンクリートの打ちっぱなし仕上げであり、今日のような白色ではなかった。床下などの見えないところに、



聖徳寺本堂



寿量院本堂

コンクリート型枠の跡の残る表面が見られ、古写真や当初の仕事が残る場所から、同様の仕上げをしない仕様であったことがわかる。

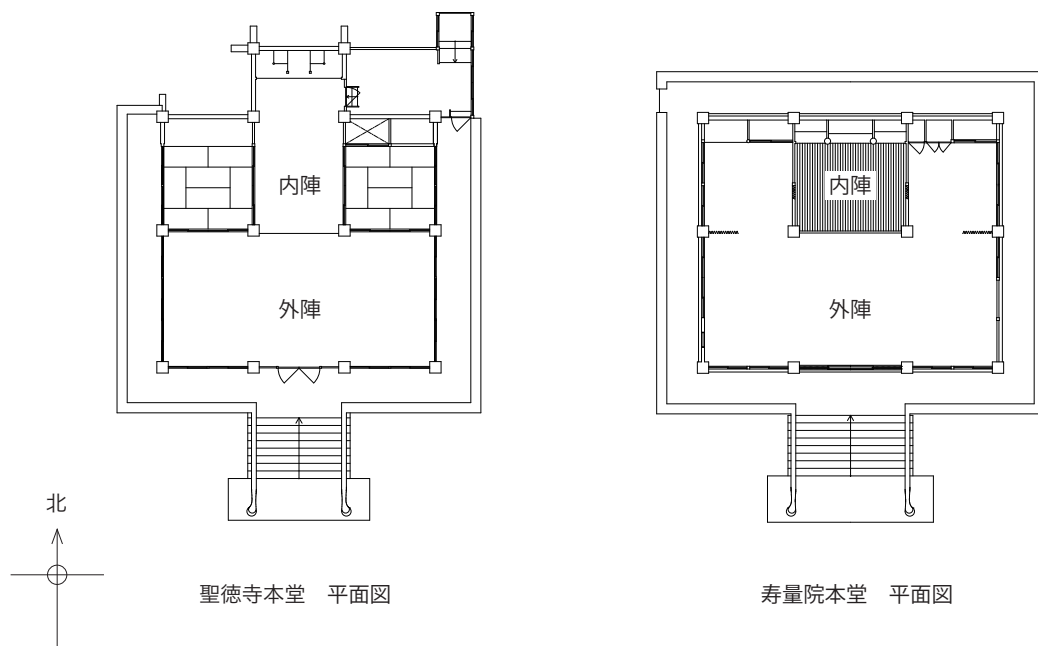
平面と堂内

玄関を入った空間は外陣で、その先の中央間が内陣、この奥に祭壇を設ける。外陣を本堂の間口全長にとり、中央間奥の内陣は床を外陣より一段高くすることで空間の違いを表す。内陣両脇の空間を座敷書院とし、奥の壁の扉内に位牌棚・納骨棚を設ける。聖徳寺では向かって右側の部屋に床が設けられている。寿量院の内陣両脇の部屋はかつては畳敷であったという。

メートル法を用いて設計された建物ながらも、設計にあたっては寸法を基本としたことが、聖徳寺の設計図に見られる寸法値からうかがえる。特に寿量院では、前身本堂の造作類が内外陣境の欄間及び内陣の祭壇廻りに再利用されており、これらが納まる柱間とする必要があることから、中央間を約2.5間に相当する4,500ミリとしている。他の柱間も尺から換算した値に近い。この寸法は、一部の部屋を畳敷にするにあたって都合がよい。柱の角には大面取り。

聖徳寺では中央間と脇間の間口各柱間を同じ3,600ミリとし、寿量院より中央間が小さいが、内陣奥に奥行1間半の空間を張り出し、祭壇を設ける。

外陣中央の空間の天井が室内空間を特徴づける。屋上ペントハウスのような構造の壁面にはガラスブロック〔寿量院〕あるいはガラス窓〔聖徳寺〕が嵌め込まれ、各本堂の竣工時には天窓から自然光がたっぷり降り注ぐ、明るく開放的な堂内が実現されていた。両本堂とも室内環境への負荷が大きいことから天井は改造されているものの、屋上の構造は温存されている。



s=1/300 同縮尺

それぞれの本堂内部の現況の仕様を下記する。

聖徳寺本堂

外陣： 吊り天井、絨毯敷

内陣： 長押、吊り天井、板敷

外陣一座敷書院境・内陣一座敷書院境： 襖、下り壁

座敷書院境（東）： 長押、床・地袋、押入、敷目天井、畳敷

座敷書院境（西）： 長押、地袋・位牌棚、敷目天井、畳敷

寿量院本堂

内外陣境に前身本堂の彫刻欄間

内陣祭壇前面に前身本堂の彫刻欄間・組物・虹梁・柱

外陣： 中央間格天井、脇間敷目天井、絨毯敷

内陣： 長押、格天井、板敷

外陣一座敷書院境： アコーディオンカーテン

内陣一座敷書院境： アコーディオンカーテン

座敷書院境（東）： 長押、押入（右は当初床）、敷目天井、絨毯敷

座敷書院境（西）： 長押、地袋・位牌棚、押入、敷目天井、絨毯敷



聖徳寺本堂 室内



寿量院本堂 室内

須藤十郎の本堂作品

須藤十郎の設計による聖徳寺と寿量院の双子の本堂に、これらの前身でもある正光寺本堂を加えて特徴をあげる。

- ・鉄筋コンクリート造ならではの陸屋根とし、軒廻りの代わりに壁を超えて屋根面を延長する（正光寺）あるいは屋上パラペットを張り出す（聖徳寺・寿量院）ことで窓上に庇を設ける。
- ・本堂の周囲にベランダ状の空間を設けて、縁廻りとする。
- ・正面中央間から外陣に入り、奥を内陣とし、両脇間に座敷書院を設ける伝統的な平面計画を踏襲する。
- ・内外陣境には結界はなく、内陣の床を一段高くして空間を分ける。
- ・正側面は開口部が広く取られ、外陣上方から自然彩光を取り入れることで、明るい堂内が実現されている。

3棟の本堂とも、長年の使用において変更された点として、外陣上の天窓から入る太陽光が堂内を熱して暑くなることから、後年窓が閉鎖されていることがあげられる。この点については、当時空調設備が建築設計に組み込まれていなかったことがあげられるものの、今日となればその後開発された室内環境を制御する装置の導入により、熱負荷を軽減した明かり取りの効果を実現できるだろう。

また、建設当時の新しい仕様であったコンクリート打ち放しを仕上げとされたものの、後年暖かい雰囲気好まれ、外部をペンキ塗、堂内をクロス張りなどに変更されている。

第3章 寿量院本堂

所在地： 千葉県柏市塚崎 815
宗派： 真言宗豊山派
竣工： 昭和 45 年（1970）
設計： 須藤十郎建築設計事務所
施工： 椎名建設株式会社

背景

塚崎に位置する寿量院は、流山市鰯ヶ崎の東福寺を本寺とする。同じ塚崎内に所在する神明社は寿量院の奥の院で、当時が神社の別当職を務めたことは、江戸中期まで山号を「神明山寿量院」としたことにも裏付けられる。寿量院本堂前に続く参道は、神明社の方角に向かっており、神明社と当寺が密接な関係にあったことを示す（注3-1）。

羽子田範宥住職より、寿量院の歴史と本堂建設の経緯をお伺いした。

奈良の長谷寺を本山とする無量山寿量院の開山を示す資料は未発見ながら、1400年前に創建されたと伝えられている。宝暦7年（1757）に中興開山義真が荒廃した当寺を復興したことが知られる。ついで、文政年間には火災により諸堂を焼失し、縁起も含めて文書が焼けてしまった。文政13年（1830）に本堂・庫裡を再建し、棟梁は手賀の仁兵衛であったことが棟札より知られる（p79参照）。

なお、寺は集会所の意味であるのに対して、寿量院の名称にある院は住まうところのある建物を指す。江戸時代までは本堂内に居住空間があったので、庫裡はなかった。また、かつて寿量院は男寺で、女寺として日蓮宗の宗賢寺を利用した（注3-2）。

特に昭和中期には、大きな社会的変化が重なった。

昭和19年（1944） 東京の入谷にいた先々代（住職の祖父）が戦時中の空襲に被災し、現地に移った。

昭和23年（1948） 国により農地解放が行われる。

昭和26年（1951） 宗教法人法が施行され、寺院の組織が縦割りになった。

この後、現本堂の建築の背景として1964年の東京オリンピックの後に残った建築資材を利用して、このあたりの寺の多くが鉄筋コンクリート造に建て替えられたことがあげられる。大津ヶ丘団地（1978年完成）の建設用地に寿量院所有の敷地がかかり、用地買収を受けたことから資金を得て、本堂を建て替えることができた。

市内の他の鉄筋コンクリート造寺院については、聖徳寺が寿量院より先に本堂を建て替えている。聖徳寺は檀家のいる寺院ながら当時の住職が早逝したので、同じ宗派の寿量院で、現住職の祖父が聖徳寺をももっていた（注3-3）。

東葛印旛大師の送り大師の結願寺を務めることから、宗派を超えて各寺院に関する情報に接する機会が多く、他の寺院本堂の建築についても聞かれてきた。近くの宗寿寺では、寿量院と同時代に鉄筋

注3-1 椎名宏雄『沼南の宗教文化誌』たけしま出版、2020（p130）及び『沼南町史 第1巻』沼南町、1979（p253-256）

注3-2 『沼南町史』、「同史料集金石文」に寿量院の石造物群の調査が掲載されている。

注3-3 他にも、信者がおらず墓地がなかった我孫子の延寿院も管理していた。

コンクリート造で本堂（1972）を建て替える際には、基礎を強化している。また、慈本寺では、モダンな形式の本堂・庫裡（1975年築）に、後年和風の瓦屋根をのせて今日見る姿になった。寿量院本堂に似たものは、同じ建築家による設計の聖徳寺本堂を除いて他に見たことがないという。

本堂

約200年前に建てられた前身本堂の建て替えにあたって、当初は木造にする予定であったが、前述の通り建築材料が入手しやすかったことから、ハスの花のイメージの鉄筋コンクリート造の耐震構造とした。昭和43年（1968）に建物が竣工、昭和44年（1969）に落慶法要を行う。本堂は4,000万円で建てられたという。設計は須藤十郎、施工は椎名建設が担当した。寿量院本堂と同時に隣接する庫裡・客殿が改築されている。

3年早く完成した聖徳寺本堂は、寿量院本堂と同じ設計者により、ふたつの本堂には共通点が多く見られることから、両者の外観や平面構成、特徴についてはp57で取り上げる。

内陣の造作（虹梁や彫刻類）には前身本堂の部材が再利用され、これらの部材の長さにあわせて、寿量院本堂の柱間は決定されている。外陣両脇の部屋はかつては天井が低く、住まいとして利用できるようになっていたという。（部材の納まり上天井高さは変わっていないようで、外陣の天井が高かったのがこのように感じたものと思われる。）

屋上の構造物の4面にはそれぞれ108個のガラスブロックが嵌め込まれ、天井が吹き抜けになっていた外陣に自然光が入る構造であった。日射が暑かったのでふさぎ、格天井を新設した。

2011年の東日本大震災後、外壁に生じたヒビにエポキシ樹脂を注入して補修し、塗装を塗り直した。この時まで、本堂の軸部は打ちっばなし仕上げであった。

庫裡

現本堂と同時に建てられた庫裡との間に、1990年代末に書院を増築して繋げた。改修前の本堂と庫裡は渡り廊下で繋がり、間には池があった。



高台に立つ寿量院本堂の姿は、遠くからも見える。
かつては画面前方の住宅地はなかったため、今日以上に際立った存在であったろう。

古写真に見る寿量院

1947年米軍撮影の空中写真には、寿量院の前身建物が写っており、1929年に守真三によって撮影された写真(p69)に見る茅葺の本堂と庫裡の姿に屋根の形式と位置関係が合致する。寺周囲の環境を見ると、農地が広がる中に昔からの集落が点在しており、戦後の市街地開発が近づく足音もまだ聞こえてこない。

現本堂建築時には、寿量院に山門があったことが石碑の陰刻から知られ、この門の姿が写真に収められていた。昭和後期に石段下から見上げた構図(p70)や1978年の送り大師の行列の写真に見られる。後者の時点では参道向かって右側の土地が墓地として整備され始めている。墓地整備が終わった時期になっても、山門はあった。山門の取り壊し時期は不明である。(注3-4)

昭和期後半と思われる節分会の写真には、本堂外陣中央間の天井が吹き抜けでガラスブロックから採光が得られるもとの形式が見られる。柱や梁の軸部は型枠板の跡のある打ち放しコンクリートを仕上げ、他の部分は白色のペンキ塗である。柱には大面取りが見られる。中央出入口の扉は両開きの金属製ガラス扉である(p75)。

戦前の伊勢参りの記念写真では、戦勝祈願のために主に女性と年配の男性たちが大勢が集まり、前身本堂前と思われる建物の階段に並んでいる。掲げられた看板には「……塚崎支部事務所」の文字があり、胸元に輪っか状の印をつけた人が数人いる。

注3-4 山門は昭和43年に箕輪の中村医院の奉納により新築された。その時まで山門はなかった。『沼南町史 第1巻』沼南町、1979。

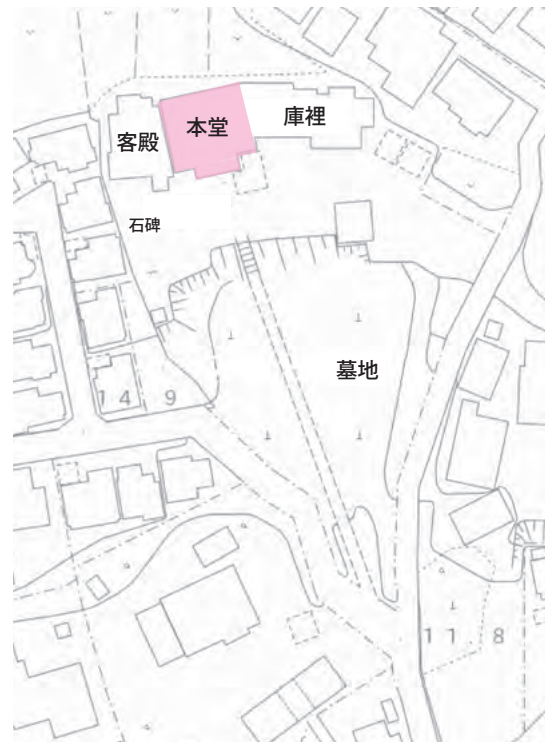


背後の建物は前身の本堂と思われる。

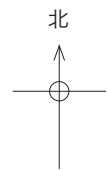
柏市市史編さん所蔵



案内図



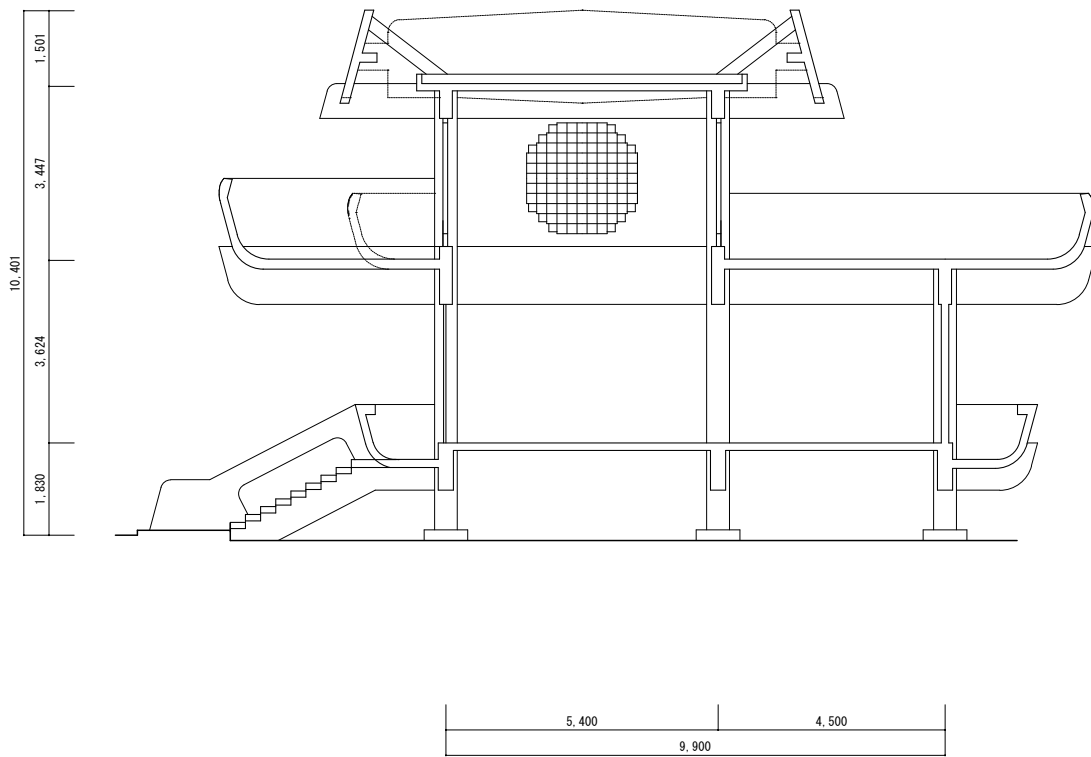
境内配置図



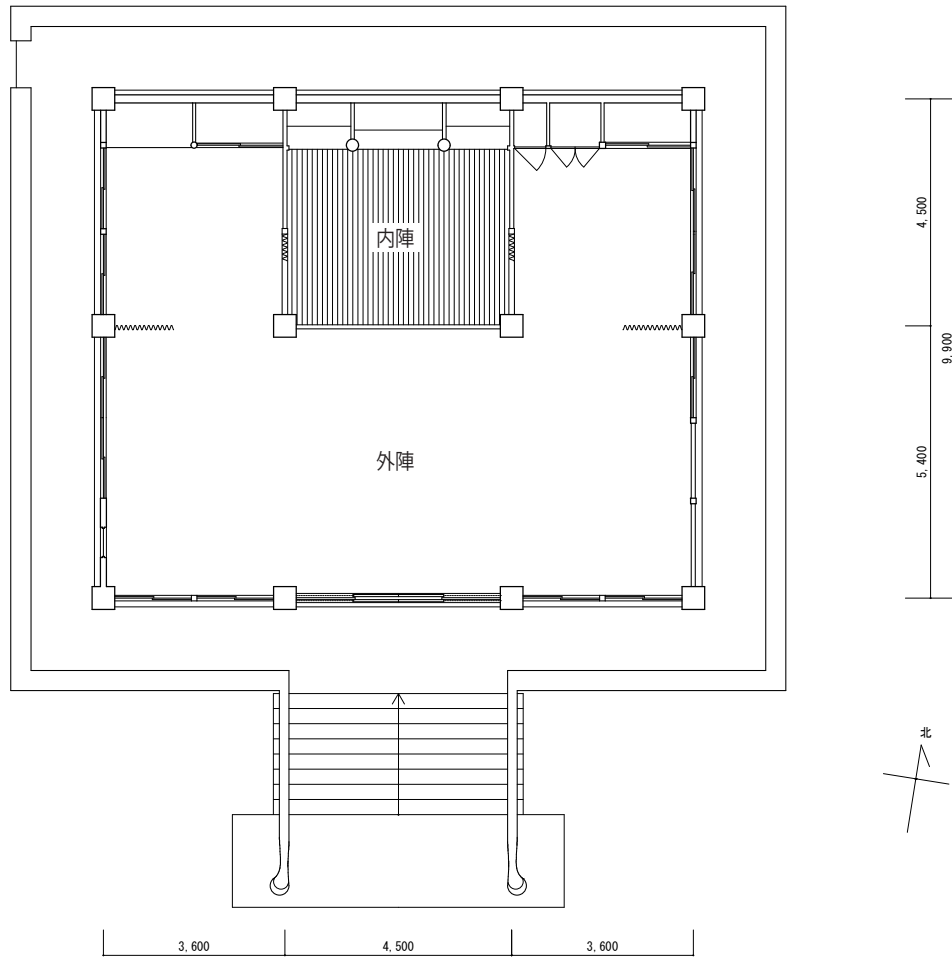
寿量院 参道から見る山門と本堂
昭和中期撮影 柏市市史編さん所蔵



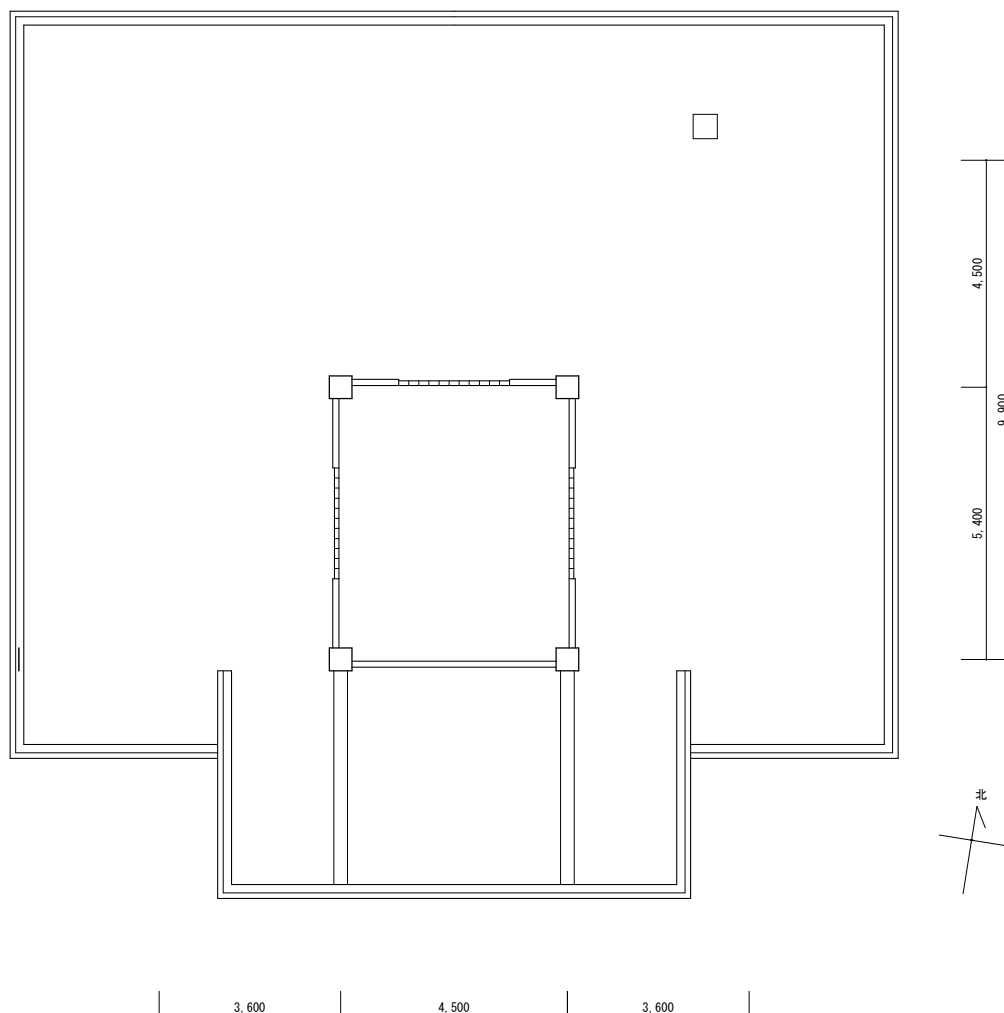
寿量院全景



寿量院本堂 梁間断面図 s=1/150



寿量院本堂 平面図 s=1/150



寿量院本堂 屋上平面図 s=1/150



1947年 空中写真 国土地理院 USA-R522-55



上図枠内を拡大
寄棟造平入の本堂と寄棟造妻入の庫裡が並んでおり、
下の古写真と配置が合致する。



塚崎寿量院本堂と庫裡 昭和4年(1929)守真三撮影

柏市市史編さん所蔵



寿量院本堂より参道の先に神明社をのぞむ。



寿量院 階段の先にあった山門（昭和後期）
柏市市史編さん所蔵



寿量院 現況



本堂全景



本堂正面



外陣から内陣を見る
内陣前の外陣の格天井は、当初吹き抜けて屋上から自然光が四方から注ぎ込む形式であった。



内陣正面 内外陣境には、前身本堂の欄間が再利用されている。
これらの欄間が納まる寸法である2間半=4.5メートルに、内陣の間口は設計された。



前身本堂の欄間建具 内外陣境（右） 楽器を奏でる天女 小鼓 笙
虹梁には華やかな絵様が見られる。



前身本堂の欄間建具 内外陣境（左） 楽器を奏でる天女 笛 琴



客殿広間の床には前身本堂の虹梁が用いられている。



虹梁の絵様 本堂は文政13年（1830）築



本堂祭壇廻りの建築彫刻

中央間の祭壇は高く、虹梁も一段高く架けられている。中央間のみ虹梁に卍が彫られている。

鶴 松 波 左脇間には鶴の子

現本堂は、前身本堂の祭壇を継承できるように、内陣の2間半（約4.5m）の間口が同じ規模で設計された。



内陣祭壇 脇間



中央間



脇間



内陣格天井の梵字と散華は、本堂を再建した先代住職の筆による。



現在外陣には格天井が張られている。当初の外陣天井は吹き抜けであった。



玄関から堂内を見た右図と同日の写真に、奥の壁上方の明かり取りが写る。柏市市史編さん所蔵



古写真 節分の豆まきの光景 昭和後期撮影
本堂は塗装されておらず、竣工時の打ち放しコンクリートのままである。縁腰壁と階段手すりは白色である。 柏市市史編さん所蔵



屋上明かり取り上の反射板
豊山派の宗紋がかかげられている。



反射板は梁と控えで支えられる。



寿量院 屋上明かり取り 窓は108のガラスブロックからなるという。
現在はペンキ塗、内側からふさがれている。

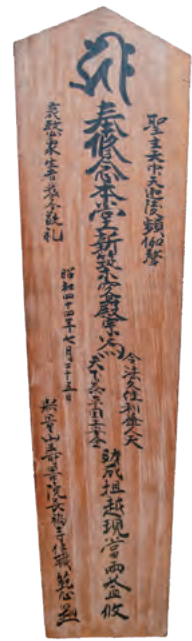


本堂前の階段は、「去年と同じように登れますか」と自身に問いかけ、若い世代と共に寺に来ることを促す。

屋上パラペット、梁先端、縁手摺、階段手摺の曲線が呼応する造形からなる。



庫裡は本堂と同時に木造で建てられ、本堂と渡り廊下で接続していた。後年、本堂との間に書院が建てられた。



(表)



(裏)

本堂・客殿新築棟札 昭和44年(1969)
 総高104.6cm 肩高97cm 上幅29.5cm 下幅19.5cm
 厚さ1.8cm 頭部の形状：尖頭 材質：ヒノキ

(裏)



南無堅牢地神 与楽眷属

南無五帝竜王 侍者眷属

壽量院総代

伊原武 伊原常吉 座間初太郎 森家一 杉浦重利 座間朝 吉場森之助

工事委員

座間清吉 森博次 吉場勘兵衛 永木正太郎 猪倉敬治郎 伊原太助 小島泰

宮後総代

近藤一雄

工事委員

吉田正吉

塚崎区長

伊原正一

施工者

千葉県柏市 椎名建設株式会社 社長 椎名弘康

本堂大工棟梁 松本信太郎

客殿大工棟梁 内海勝広

本堂大工 佐藤昶男

湯浅吉広

杉山求

塚本

寺島喜代司

客殿大工 国雄

本堂大工 根本勝躬

薦

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃



(裏)



(表)

客殿新築棟札 文政13年(1830)

総高104.8cm 肩高97cm 上幅32cm 下幅19.5cm
厚さ2.2cm 頭部の形状:尖頭 材質:スギ

※ 翻刻は『柏市史 沼南町史料集 金石文Ⅲ』
柏市教育委員会、2010 掲載分に加筆

(表)



聖主天中天迦陵頻伽声 文政十三庚寅年

下総国葛飾郡塚崎村
寿量院

奉再建客殿一字為 助成檀越現当両益 焉
令法久住利益人天
天下泰平国土安全

哀愍衆生者我今令敬礼 十月吉旦

供養導師本寺 東福寺廿六世宥嚴
鱈ヶ崎

(裏)



南無堅牢地神 与楽眷属

南無五帝龍王 侍者眷属

大工棟梁手賀村仁兵衛

小工 当村 新内

塚崎村 隼人

世話人 四良左衛門／新内／伊左衛門／六兵衛／勘左衛門／市右衛門／

組頭 久兵衛／同 六右衛門／同 主水／名主 庄兵衛



現 寿量院客殿

本堂とともに再建した客殿では、前身本堂の大虹梁が床の間に再利用されている。7、8年前の台風で屋根が剥がれたのを機に、大人数の法要に対応できるように現在の半分の大きさであった客殿に増築した。

3 段目
以下の寄付が記されている。

特別志納者芳名
六角天蓋
木製幢幡
仏天照明燈
本堂水引
須弥前机
塔婆立一对
磬台
密壇
石灯籠一对
五具足
中央香台
不動明王一体修理

4 段目（前段続き）

本堂整地工事一式
客殿幕一式
山門前コンクリート工事
本堂大時計
客殿電気時計
落慶式花火
座布団二十枚
4～7 段目
〔記念碑建立寄付者芳名〕
には88名が記されている。
末尾に石材業者名がある。
布佐
清水石材



寿量院 石碑 「本堂 客殿 庫裡 新築記念」
 昭和45年(1970)
 高さ182cm 幅80cm 厚さ15cm
 粘板岩製

〔表面〕

本堂 客殿 庫裡 新築記念
 真言宗豊山派管長 宥高書 落款 落款

〔裏面〕

1段目

本堂客殿庫裡建築誌

当山は阿弥陀如来を本尊とし無量山寿量院と号す 文政十三年木造萱葺の本堂庫裡が造建された 然るに年移り星替りて腐朽亦これに伴い修理修復多再に及ぶ 住職羽子田範心僧正 四隣の発展と近代都市化の推移を熟考 担徒総代と協議の上寺有財産を処分し本堂を鉄筋コンクリート建客殿及び庫裡を木造建として永世護持するものなり

同上施行関係の左の如し

着工 昭和四十四年二月

完成 昭和四十五年八月

設計 須藤十郎建築設計事務所

施工 椎名建設株式会社

総工費 二二二〇万円也

記念碑建立者 範紘

昭和四十五年十二月五日

2段目

住職当山第十六世権大僧正

羽子田範心

檀徒総代工事委員長

吉場森之助

檀徒総代工事委員

伊原 武

座間初太郎

杉浦重利

近藤一雄

工事委員

座間重雄

秋谷辰雄

座間清吉

森 博次

吉場勘兵衛

永木正太郎

猪倉啓治郎

伊原大助

伊原常吉

小島 泰

森 家一

座間武敏

吉田正吉

本堂と庫裡

今回個別調査対象とした寺院では、本堂とともに庫裡が建て替えられていた。本堂を鉄筋コンクリート造の新しい形式としながら、住まいである庫裡はいずれも木造とされたことが特徴的である。

大人数の接客や会合のための空間として客殿が別棟で設けられたのが寿量院（p80）と宗寿寺（p96）で、聖徳寺では後年阿弥陀院（p48）が建てられた。従来各家で行われてきた儀式を寺院で担うようになったことの影響がうかがえる。

行念寺では、モダンな庫裡が本堂と並んで境内の景観をかたちづくることを表現する、両者を並べた立面図が設計者により作成されている。



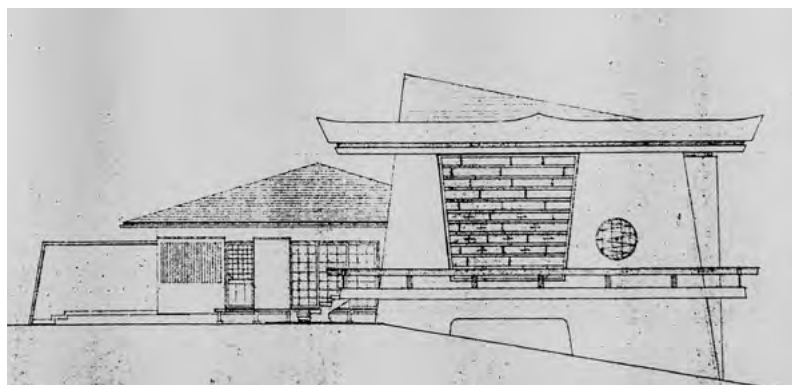
宗寿寺庫裡 2階を増築、一部建て替え



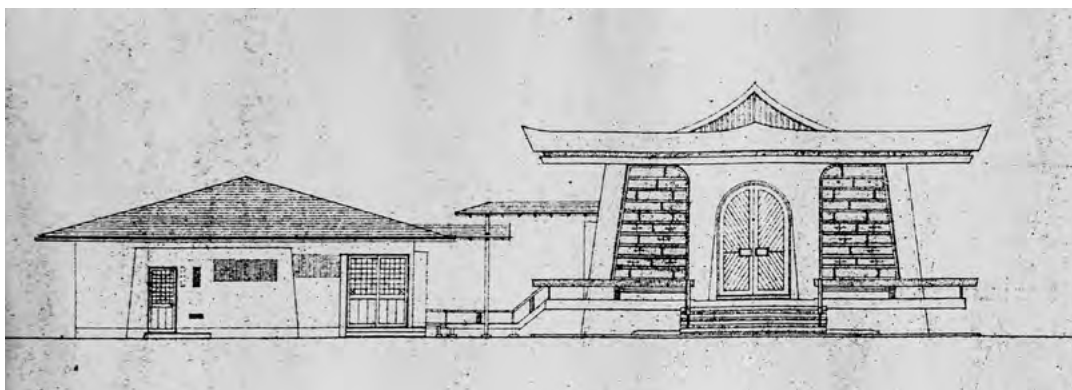
宗寿寺客殿 渡り廊下で本堂に接続



行念寺庫裡



行念寺庫裡と本堂の側面図 境内奥が斜面となる



行念寺庫裡と本堂の正面立面図 高山慎建築設計作成 行念寺所蔵

第4章 宗寿寺本堂

所在地： 千葉県柏市藤心 305

宗派： 真言宗豊山派

竣工： 昭和 47 年（1972）

設計： 榎本建築設計事務所

施工： 椎名建設株式会社

背景

安養山誓心院宗寿寺は、寛遍大僧正和尚により仁安元年（1166）に創建されたと伝わる（注4-1）。長谷寺が本山である。江戸時代は現松戸市大勝院の門徒寺であったと言われるが、その理由は不明である（注4-2）。

寛政6年（1794）に本堂を建立、釈迦牟尼如来を本尊とした。その後無住となった宗寿寺では、明治44年（1911）に今日まで続く8月の大施餓鬼の法会が行われるようになった。明治時代以降、東京の住職である野々部恵且僧正以降同家が3代兼務していた。昭和31年（1956）以降第21世白井世雄（としお、僧侶名せいゆう）僧正の代に本堂・客殿・庫裡を建立、今日見る境内が完成された。父第21世は板橋に本家のある三男で、宗寿寺に来て住職となった。以上、第22世白井信樹（のぶき、僧侶名しんじゅ）住職（1959年生まれ）にお話をお伺いした。

宗寿寺は、東葛印旛准四国八十八ヶ所第七十八番であり、近年では平成30年（2018）に東葛印旛大師巡拝一送り大師一の結願寺となった。

境内

境内は西に正面を向ける。通りから右手に墓地を見て奥に伸びる参道の突き当たりに本堂が立つ。本堂前には弘法大師の像、右手手前には現本堂の新築を記念する石碑がある。本堂に向かって左側に、本堂と同時期に建設された木造平屋の客殿、その手前に同じく木造の庫裡がある。庫裡は後年2階を増築、西寄りの範囲が建て替えられている。本堂は完成以来、塗装工事を3回ほど行っている。出入りの大工は総代の知り合いである。

前身の茅葺の本堂は規模が小さく、庫裡とともに傷んでいたところ、寺所有の土地の売却を通して本堂他の建物の建て替えを果たすことができた。当時40家弱であった檀家数を増やすことを考え、施餓鬼会時に大勢が集まる場所が必要であったことから、10畳2室の続き間からなる客殿を新たに設けた。ここは法事の控え室にも利用されている。

昭和47年（1972）に建て替えた本堂を鉄筋コンクリート造にしたのは、木造より傷みにくいと考えたからである。真言宗豊山派の寺院では鉄筋コンクリート造の本堂としたところが、寿量院・観音寺・法林寺などがある。

本堂の設計監理者は、建築図面に榎本建築設計事務所の名が記載されていることから判明し、書院に掲げられた「本堂庫裡落慶供養 記念碑志納者芳名」（昭和47年11月19日付）の額には、再建

注4-1 『報恩 弘法大師 1150年遠忌記念事業誌』真言宗豊山派千葉県第一号宗務支所、1985

注4-2 『柏市史 近世編』p747

工事委員の役員・委員の名前に加え、椎名建設が施工者として記載されている。当社は、鉄筋コンクリート造の聖徳寺本堂（1967）及び寿量院本堂（1970）の施工を担当している。

本堂

前身本堂と同位置で建て替えられた本堂は、鉄筋コンクリート造、間口3間・奥行3間、正面と両側面に縁を回し、方形造、棧瓦葺とする。外部は、モルタル塗の軸部と縁高欄を焦茶色、壁と軒裏を白色にペンキ塗。落慶法要時の記念写真に見る本堂もこの色彩である（p97）。

鉄筋コンクリート造で軸部を造り、天井スラブを外壁を超えて伸ばして軒廻りとする。設計図面より、この鉄筋コンクリート造の躯体の上に木造の屋根を造り、瓦葺とする構造であることが判明した（p101）。屋根の屋だるみは、柔らかな曲線を描く。建物周囲を回る布基礎は互いに柱通りで地中梁によって繋がれている。床組は木造である。

骨太のコンクリート造本堂の外部には、あえて木造を思わせる造作は用いられていない。柱頂上の頭貫先端は柱から突出させ、化粧隅木はあるが、化粧垂木はない。窓開口部は上下の貫の間に納め、長押は用いない。縁高欄は建築材料に応じた意匠とし、縁の床も平滑なモルタル塗仕上げである。幾何学的な意匠に抑えられた向拝では、眉のみが施された虹梁上の臺股だけは伝統的な意匠からとり、中央に豊山派の宗紋である輪違を立体的にあらわす。正面出入口の両開き鉄扉は山吹色、引き手は円形、両扉の上方にも真鍮製の金メッキ仕上げの輪違を取り付ける。側面出入口には鉄扉の開き戸。

平面計画

平面は900ミリを単位とし、規則正しく計画されている。間口を中央間4,500・両脇間2,700ミリ、奥行は手前から3,600・2,700・3,600ミリの柱間とし、正面に奥行2,700ミリの向拝をつけ、背面には大きな須弥壇が納まるように奥行900ミリの突出部を設ける。3周に高欄付きの縁を回す。

内陣の間口が4,500ミリ（約2.5間）とされたのは、前身本堂の欄間建具の寸法に合わせるためであったと思われる。また、室内に畳を敷き詰めるのにも、和室の規模としても、木造で用いる尺に換算できる単位が都合がよい。図面中の部屋名称は、「外陣」と「内陣」、内陣両脇の2部屋は「和室4.5畳」と記されており、いずれも畳敷き、敷目天井。西室には簡略化された床、東室に位牌棚が設けられている。向かって左手奥には、庫裡への渡り廊下を接続する。

堂内

外部では材料を木からコンクリートに変えて全体として伝統的な寺院建築の形式が表現されるのに対して、堂内はモダンな構成からなる。手前を外陣、奥を内陣とし、内外陣境の鴨居上には前述の前身本堂の彫刻欄間建具3本を掲げる。床は、外陣手前を板張り、外陣中央奥は周囲を畳敷きとし、外陣脇間とこの奥の2つの居室は畳敷きとする。

天井は木造の造作を天井スラブと梁から吊り、格天井の枠の中に格子を建て込む（小組格天井ほど小さい格子ではない）。中央の通りでは天井裏に電気照明を埋め込むことにより、堂内に柔らかい明かりが広がる。室内の壁は漆喰塗、構造材の柱は平滑な金鍍仕上げにペンキ塗。このように堂内では、コンクリート造を意匠として見せないように工夫されている。天井灯の一部には蛍光灯。

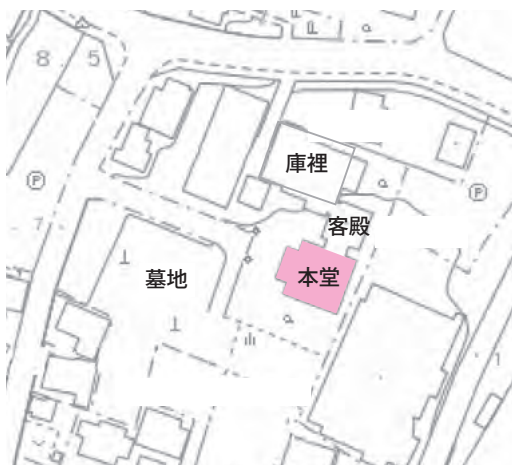
窓には引き違いのスチールサッシを建て込み、いずれも室内側には引き戸の障子戸を設ける。



本堂 扁額



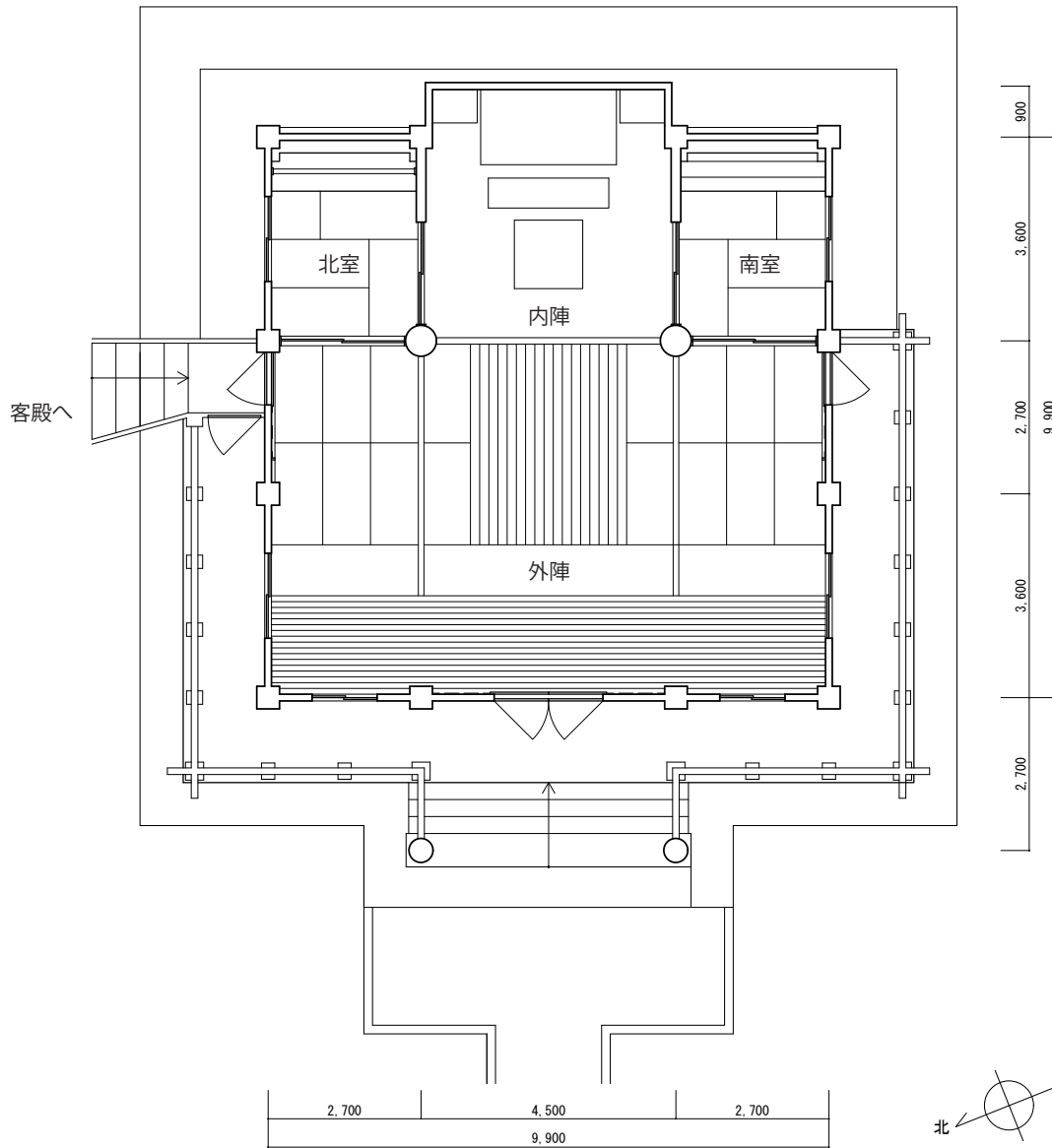
案内図



境内配置図



境内を南東の空中から見る 1992年 宗寿寺所蔵



宗寿寺本堂平面図
s=1/120



本堂正面全景



参道から本堂を見る。

本堂と同時期に
客殿・庫裡を建設

参道から境内の奥を見る。

弘法大師像は、1150年の
御遠忌記念事業として昭和
60年に建立



客殿妻飾りには鶴の懸魚
前身建物のものと思われる。

客殿玄関



本堂正面を向拝越しに見る。扉には豊山派の宗紋である輪違が輝く。



本堂正面詳細



本堂正面



本堂正側面

安養山
本堂落慶供養記念碑
宗寿寺



本堂落慶供養記念碑



本堂 南西隅に半鐘を吊るす。



本堂への向拝取り付き部分見上げ 化粧隅木に風鐸



正面軒を見上げる。向拝を虹梁で繋ぎ、化粧垂木は用いない。



本堂 正側面 南から見る。



本堂内全景



外陣より内陣を見る。

前身本堂の欄間彫刻が、
内外陣境に飾られている。



左



中



右



内外陣境
欄間彫刻
全景



内陣天井を見上げる。



内陣奥の須弥壇に厨子を据える。



天蓋 墨書

本堂庫裡落成記念
昭和四十七年十一月十九日
安養山宗寿寺
現住 白井世雄代

東京翠雲堂 謹製

天蓋内部



外陣天井見上げ 中央の通りには電気照明が埋め込まれている。



外陣天井造作



床のある北室 (左)



位牌棚のある南室 (右)



本堂から客殿に至る渡り廊下



客殿は本堂と渡り廊下で繋がる。



客殿
10畳間が2間の続き間
手前は板敷き

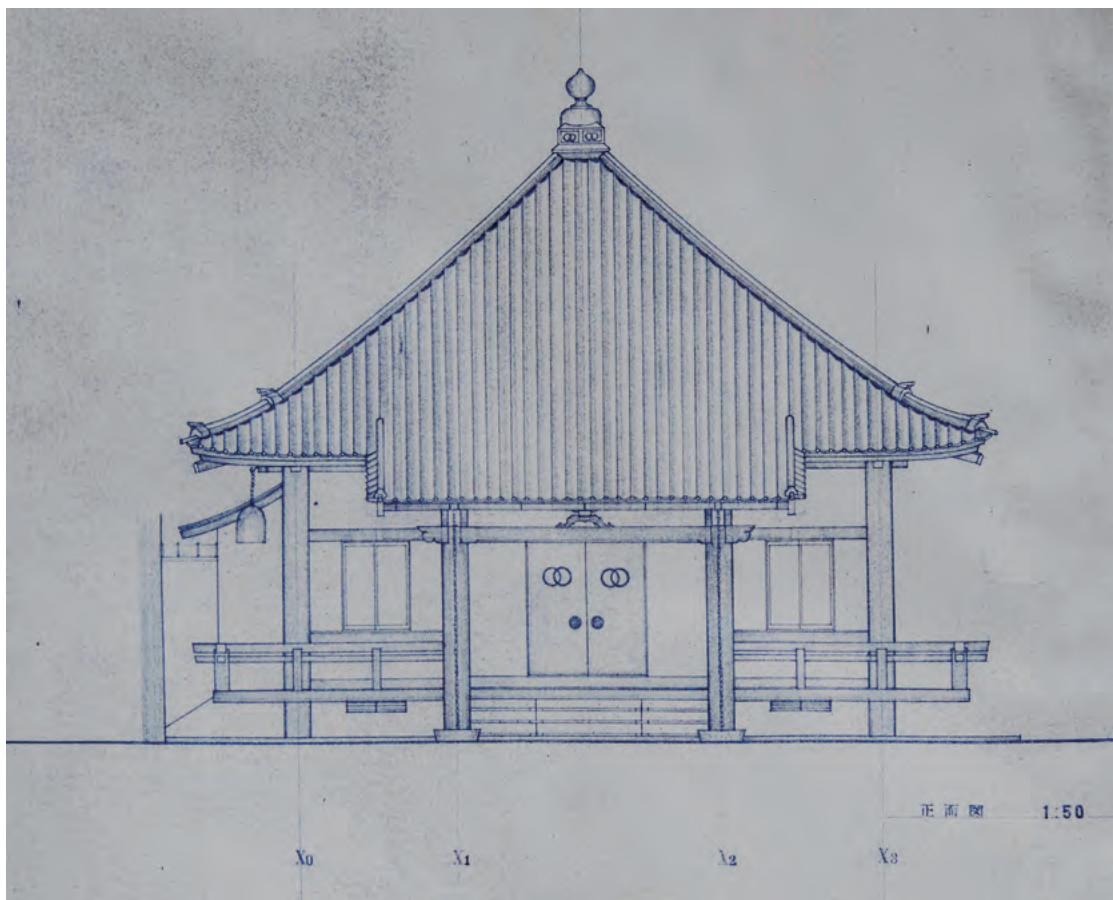


客殿玄関
画面右上に上図の部屋

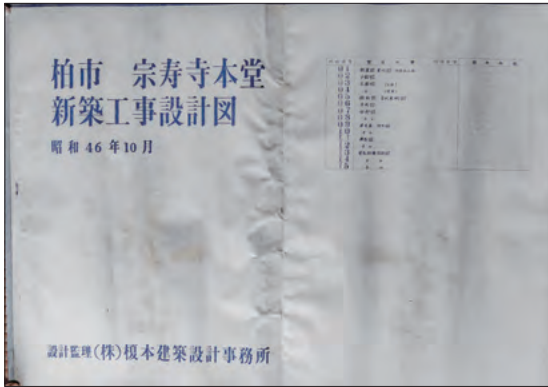
設計図面

昭和46年（1971）10月付「柏市 宗寿寺本堂 新築工事設計図」には、設計者榎本建築設計事務所（千葉市）の榎本文吉、協力者ハルナ建築設計事務所の名が見られる。

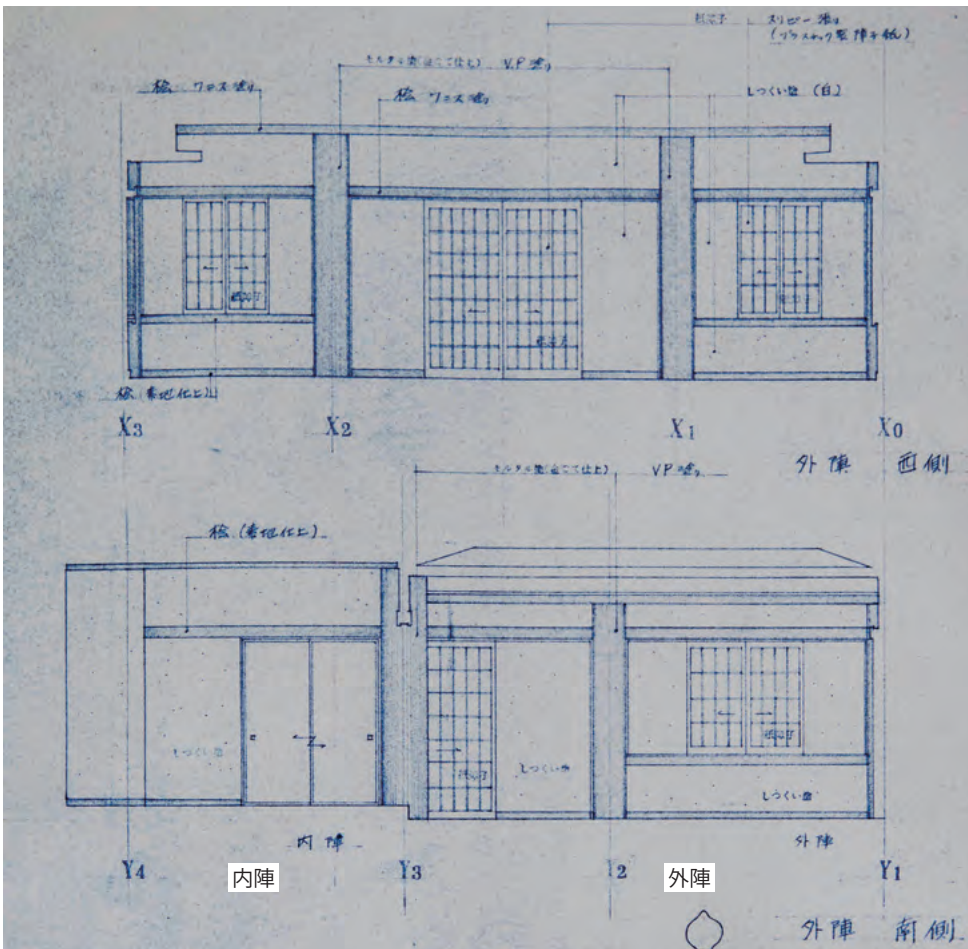
庫裡との接続部の納まりが実施された建物と異なるものの、本堂はおおかた図面通りに施工されているようである。また本堂には建設当初から大きな改変はなく、設計図面と照らし合わせると床仕上げが一部更新されているのが確認できる。住宅と庫裡については別途昭和46年7月18日付の設計図があり、本堂に先行して工事が行われている。



本堂 正面図



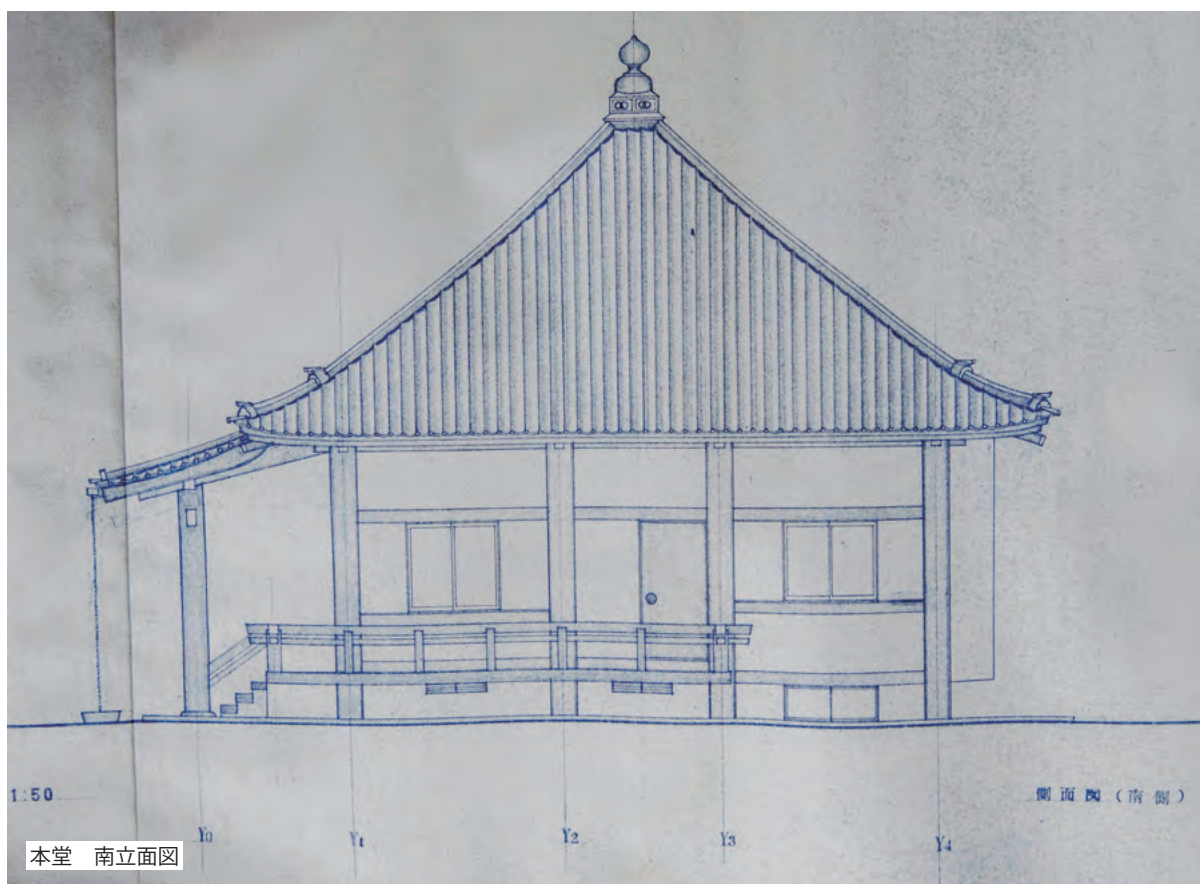
「宗寿寺本堂新築工事設計図」 昭和46年10月
榎本建築設計事務所作成
白焼図面 表紙



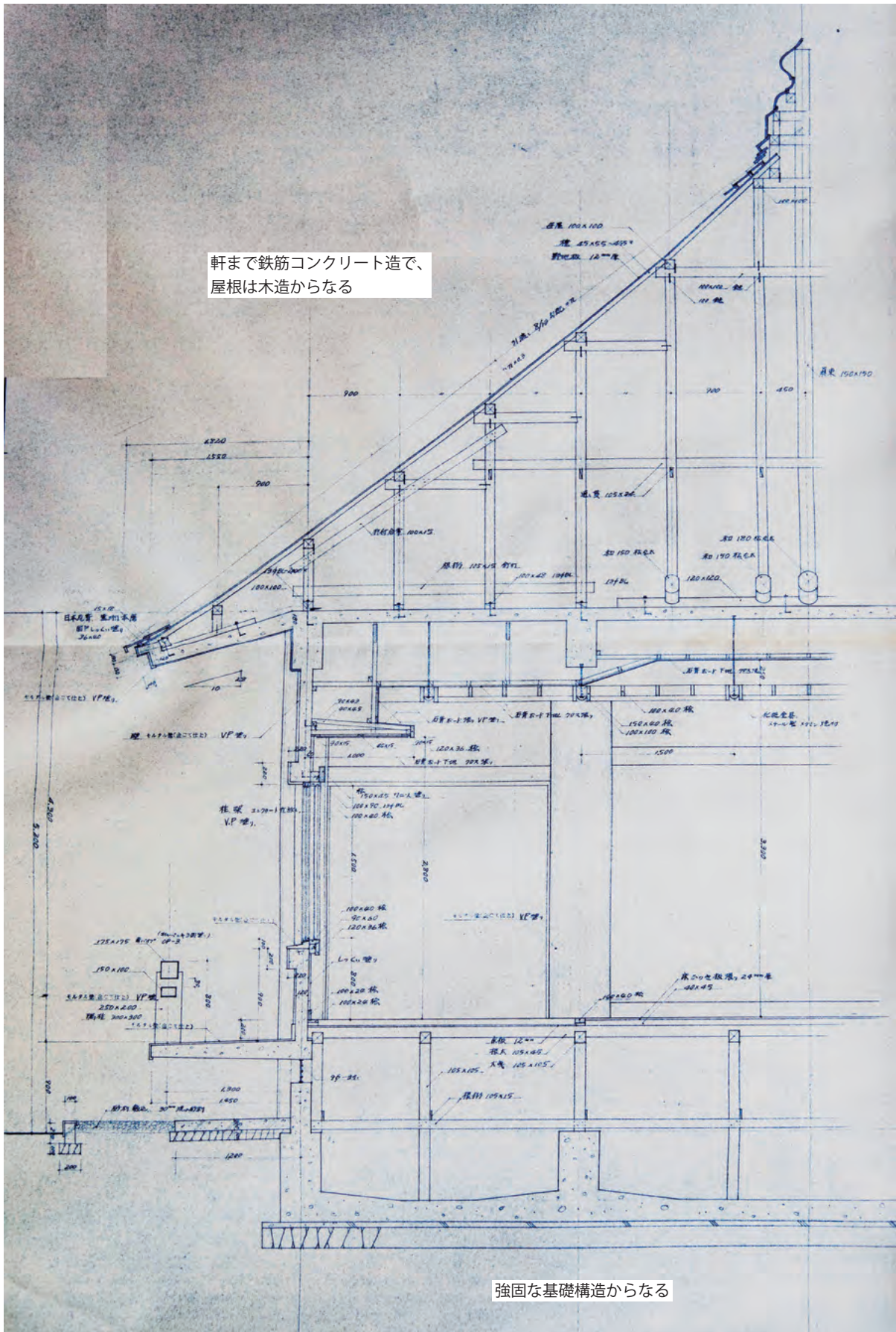
正面壁内側の展開図
各開口部には、引き
分けの障子戸

正面-内陣
断面展開図
内外陣境の空間構
成を示す。

断面図 室内展開図



「宗寿寺本堂新築工事設計図」 榎本建築設計事務所作成 昭和46年10月 宗寿寺所蔵



本堂 詳細梁間断面図



北側面には、庫裡への渡り廊下が接続する。

第5章 行念寺本堂

所在地： 千葉県柏市中新宿 1-6-3

宗派： 浄土宗

竣工： 昭和 43 年（1968）

設計： 高山慎建築設計

施工： 清水建設

背景

明応 2（1493）年に創建された金龍山不退院行念寺は、柏駅から南西に約 4 キロの旧水戸街道沿いにある。行念寺は、現松戸市小金の東漸寺と同じ愚底上人開基の子寺としてまもられてきた。東漸寺はかつて根木内^{ねぎうち}に位置し、富士川流域の底湿地帯にあった。およそ 530 年前に東漸寺住職を退隠すると、富士川の水害のない、近くの高台の中新宿に行念寺を開創して、經譽愚底上人が隠居した。

以前の行念寺の境内には、茅葺の本堂と庫裡を寮とする堂宇があった。江戸時代が終わり徳川家の庇護を失い親寺東漸寺が荒廃してゆく中、明治時代に入ると大正年間まで住職不在の時代もあったが、先々代の吉井泰順住職が行念寺に入り、再興した。（東京都中野区から移転してきた。）

西巢鴨にある大正大学で教授として教鞭をとり、また増上寺では執事も務めており、数々の社会的役割を担っていた。

行念寺の歴史をお聞かせいただいた吉井泰遠住職は、来迎寺住職を兼務している（注 5-1）。

先代が行念寺に晋山する時に合わせて、本堂・庫裡は新築された。今日の本堂と庫裡が建てられる前の境内を 1966 年の空中写真を見ると、大きな寄棟造の屋根があり、前身本堂であろう。昭和中期には街道沿いと言えども建物はまばらであった。境内の古い樹木には、本堂前のイチヨウ、本堂後ろのスタジイ、門脇のケヤキがある。

墓地は昔から参道脇の現地にあった。かつては土葬で埋葬しており、墓地の区画は比較的大きい。戦時中も穴を掘って埋葬していたことが伝わる。昔からの古い檀家が多く、出入りもないため、新たな区画として本堂後ろの土地に墓地を新設することを検討したが実施には至らなかった。

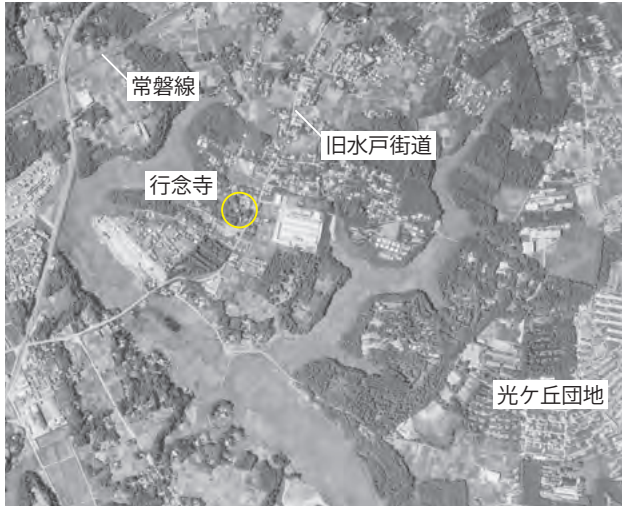
本堂の設計まで

新本堂の設計に先立ち、檀家総代と住職は検討を重ね、「今の時代の堅固且つ明るい空間のお寺」を志向した。参考になる方々の神社仏閣を視察して回った（注 5-2）。その結果、本堂の色合いは白を基調とした。明るい空間を追求し、現代の資材であるガラスを多用したデザインに至った。木造に伴う部材の飾り彫刻や鍔金具を排除して「デザインを見せる」建築となった。

1960 年代当時、戦災により多くの堂宇を失った増上寺では安国殿を仮本堂として使用しており、大殿再建の準備をしている最中であった。先々代の吉井泰順上人も増上寺側で参画していた。増上寺の大殿再建は清水建設が施工しており、その直前の行念寺の本堂建て替え現場が同建設会社の若手育

注 5-1 来迎寺本堂は、山本想太郎設計アトリエ設計、2013 年築の現代建築である。

注 5-2 筆頭総代の田中茂氏は江戸時代の名主の家で、近代は写真屋を生業としている。



1966年8月24日 空中写真 国土地理院 MKT663X-C1-5



左図拡大 配置図の範囲

成・手習いの場となったと伝わる (p10 参照)。

行念寺の設計図面に見られる設計者は高山慎である。『全国建築設計事務所手帳 1978』(建設出版社、1977)によると、高山は1964年に清水建設本社設計部を退社し、翌1965年に高山慎建築設計研究室を設立していることから、行念寺本堂建て替えの話があがった時点では清水建設の社員で、独立してから設計を受託した可能性がある。

行念寺では本堂の南側に立つ木造の庫裡も同時に建設された。

本堂の建築

街道に面する行念寺の門柱の先に続く参道の奥に、本堂は東に正面を向けて立つ。柱が内転びに立つことから、立面は平行四辺形で、柱間に納まるガラス壁も斜めになっている。柱の傾きは、図面に記載された寸法から算出すると1.25寸勾配(高さ方向10に対して水平方向に1.25傾く)で計画されている。正面中央に観音開きの木製扉を設け、正面と両側面の壁は小割りにされた窓からなる。ガラス壁は幅広の横棧で仕切られ、ここにガラス板が嵌め込まれる。手の届く範囲の窓は開閉できるように引き違いのガラス板が入っている。

背面側が斜面になっている高台の境内地をいかして、背面には奥行1間半の地下階を設け、納骨堂とする。本堂の床下は、梯子や盆踊りの櫓などの資材置き場に利用している。

正面に5段の階段を設け、本堂全周に回された縁の高欄は、木製の手摺と金属製の手摺子からなる。このように材料と意匠を変えながらも、伝統的な形式を読み替えて踏襲している。手摺の断面も平行四辺形からなる。この上に軒の出を大きくとり、庇を兼ねる屋根を張り出す。

屋根の隅と各面中央ではパラペット上端を迫り上げて、直線的な屋根に軒反りの印象をもたらす。重量感のある本堂躯体の梁及び軒を支える梁は、屋上パラペットとその下に張り出す軒裏に巧妙に隠され、軽快な軒廻りが実現されている。

陸屋根上の正面中央に、両手の親指を合わせて伏せたかたちであるという、三角錐を寝かせて屋根を架け、正面のガラス張りの妻が天窓となり、縦格子越しに堂内に自然光がもたらされる。図面より、



行念寺 配置図

上が北



通りから見る行念寺 右手に墓地、参道奥に本堂がある。

妻壁前面の端は、正面壁の傾きの延長線上にあることがわかる。地上から見ると小さく見える妻は、頂上の高さが屋上床面より2メートルほどある。

雨水は、屋根の四隅から柱に沿わせた縦樋に落とすようになっている。

鉄筋コンクリート造の本堂の平面構成は伝統的な三間堂のように、4周に縁が回る。平面は9.0メートル(5間)四方で、正面寄りの3間を外陣、奥の1間半を内陣、最奥の半間を祭壇(中央)と位牌堂(両脇)とする。図面では、位牌堂の建具は引き違い戸になっているが、当初より現状の両折戸であった。

正面中央の扉は斜めに板張りされた開き戸で、工芸品の引き手が取り付け。この内側に引き分けのガラス戸を建て込む。以前は、出入口上方と同じワーロン紙張りの障子戸であった。

内外陣境の造作はなく、堂内は1室からなる。床は全面畳敷きで、祭壇前の内陣が一段高くなっている。祭壇前の天井に吊るされた木製格子の人天蓋とともに、内陣の空間をかたちづくる。天井を見上げると、梁が十字形に架かり、天窓が内陣へと視線を導く。

建築当初の祭壇廻りはモダンな仕様であったところ、新盆の檀家が本尊周りへ仏具や什物を奉納するのが慣習となっており、祭壇の折り上げ格天井と仏天蓋の新設や来迎壁の金箔装飾など、徐々に和風寺院の伝統に倣って荘厳化が進んできた。

向かって左側手前には、縁に出る出入口があり、ここから庫裡への渡り廊下に出る。右奥には丸窓がうがたれ、室内に掛け障子を取り付く。ガラス壁同様に、室内から見る側廻りの壁も斜めになっている。

修理の経緯

2007年に本堂と庫裡を大改修し、塗装工事と屋根防水改修工事を行った。通常は、檀家総代主導のもと、檀家内の建築関係者で工事が進められてきたが、この時は塗膜防水工事が確実に施工できる工務店に修理を任せたとする(工新建設(株)東京都新宿区)。

2011年の地震時には屋根にヒビが入り、修理をした。ここは地盤が良い。

吉井泰遠住職は、昭和40年代前半の寺院建築でこれほどガラスを使った本堂を見たことはなく、

強風時には多少のすきま風が入るが、明るい空間は維持されている。一方、陽射しが堂内に差し込むので畳等が色あせしやすく、また壁面のガラス面積が広いため断熱性がないので冬は寒い。寒い時期には灯油ストーブを使用している。夏季は空調設備はないが、ガラス窓を開けると風通しはよく、不便を感じることはなく過ごせるという。

移りゆく社会の中で

一般的には250戸程度が継続的に護持可能な規模とされるところ、行念寺の檀家数は約50戸で、寺に集まるのは行事の時に最大で50人程度である。2023年には、行念寺開創530年の慶讃法要が行われた。夏の大施餓鬼会（8月21日）と秋の十夜法要（11月20日）が主な年中行事である。昭和時代は各檀家を回る月参りがあったが、平成に入ると正月・春と秋の彼岸・盆（棚行）の4回となった。近年は新型コロナ禍以降実施するのが難しく、正月とお盆の2回になっている。また、六道や念仏講も存続していたが、平成の中頃（15-16年頃）には社会状況が変わり廃止になった。

今までは護持会が主催して、年中行事及び夏と年末の大掃除、樹木の手入れや草とりを檀家の勤労奉仕で長らく維持してきたが、檀家の世代が替わる中で今後も勤労奉仕で続けられるかどうかかわからない。

次の代のことも含めて今後のことは未定である。浄土宗の寺院は東葛築は特に少なく、柏市は3ヶ寺に留まる。近隣では、我孫子市0、流山市3、松戸市5を数える。



本堂 框（かまち）で一段上がる内陣では、人天蓋を格子の吊り天井とした。
祭壇は内陣奥に造り付け、折り上げ格天井に仏天蓋がある。



本堂全景



本堂正面 梁は陸屋根面より高く配置し、軒裏を平らに仕上げる。



外陣見返し 正面と両側面の大きな開口部に加え、正面の妻からも彩光が得られる。
本堂への出入口は、内側に引き分けのガラス戸、外側に木製の開き戸を重ねる。



内陣



玄関扉引き手



正面 ガラス戸の外側に開き戸



正面



側面



側面開口部



鉄製縁高欄 隅部



正面階段側面



本堂背面
斜面に立ち、下層は背面側にのみある。背面中央の扉から安霊室に入る。



納骨堂
かつて東漸寺の墓地だった土地から発掘調査で人骨が出てきたことがあり、行念寺と縁のある場所にあった遺骨もこの納骨堂に収蔵してある。供養塔を建てたかったがかなわなかった。



納骨堂出入口
「安霊室」と掲げられている。



屋上から屋根を見る。



正面妻の明かり取り



右脇外陣に丸窓、掛け障子



側面の窓



背側面 間口が1階で9mの末広がりの壁は、下階で間口9.75mになる。納骨堂の奥行は9尺(2.7m)



正面窓建具詳細



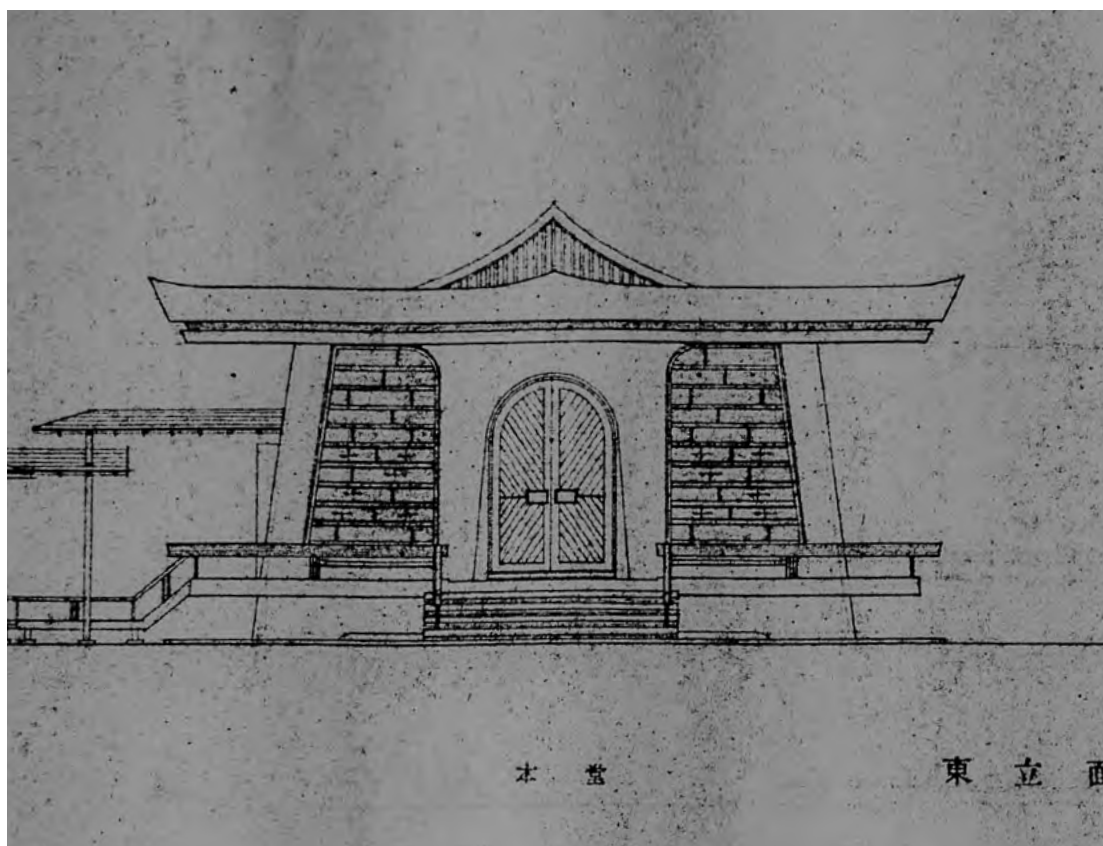
庫裡側の縁 本堂側面に出入口がある。(右図)



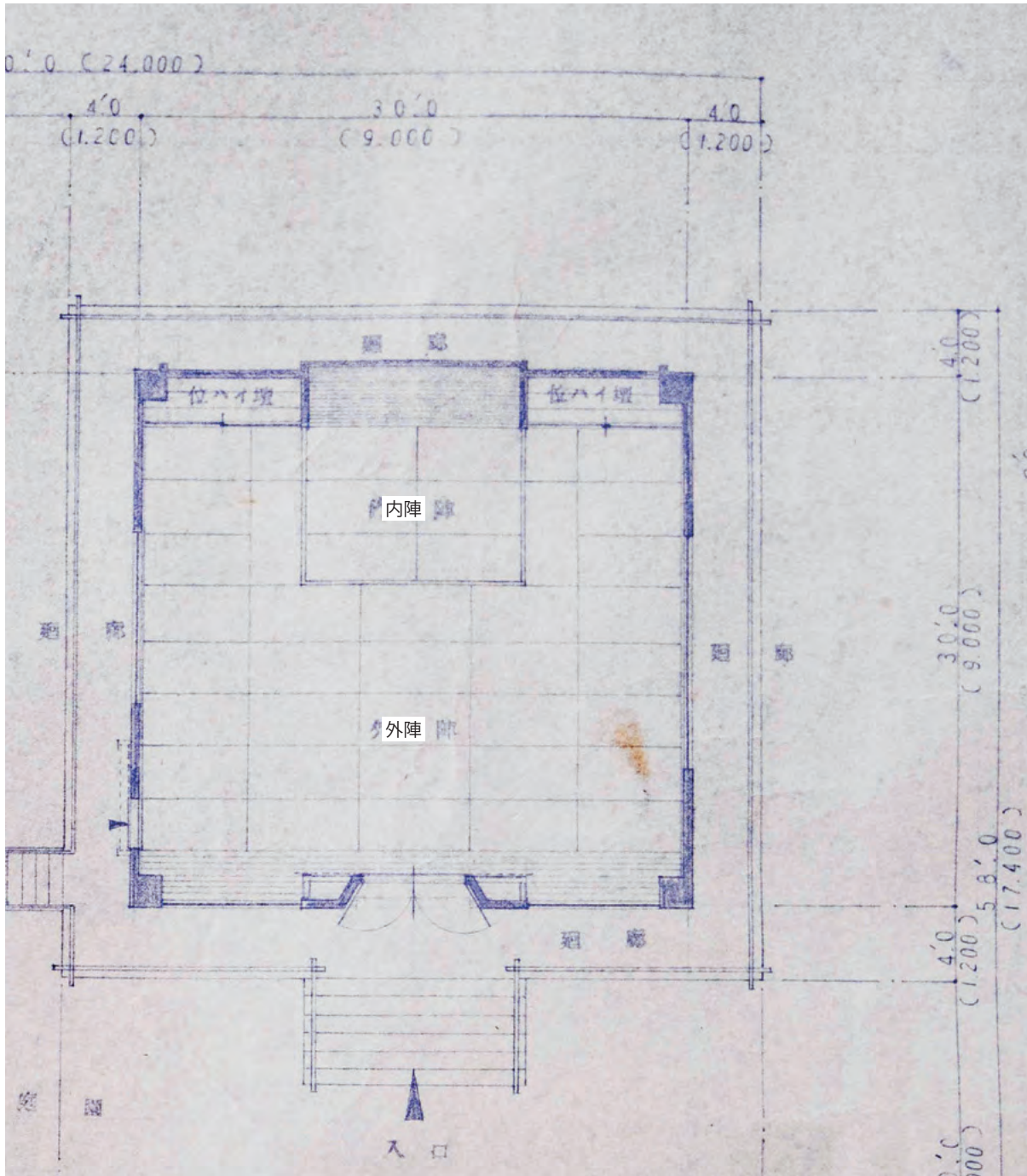
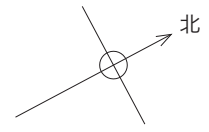
庫裡側の出入口
引き戸の建具は垂直なので、壁が傾斜しているのがわかる。



庫裡 本堂南側に渡り廊下で接続する。本堂と同時期に木造で建てられた。



行念寺本堂 立面图



行念寺本堂 平面図（部分） 白焼き図面 594mm×420mm 高山慎建築設計作成 行念寺所蔵

本堂は、30尺（9m）四方の平面に幅4尺（1.2m）の縁を回す平面からなる。中央奥に設けられた12尺四方の内陣は周囲の外陣より1段高くする。内陣の両脇の奥に位牌棚を造りつける。板敷きとする外陣正面寄り以外は、畳敷きとする。

参考文献

- 横山秀哉『コンクリート造の寺院建築』彰国社、1977
『沼南町史 第1巻』沼南町、1979
『柏の仏像：柏市内仏像等調査報告書』柏市教育委員会、1989
『沼南町史 史料集 金石文1』沼南町、1992
『柏市史 近世編』柏市、1995
『柏市史 沼南町史史料集 金石文Ⅲ』柏市教育委員会、2010
青柳憲昌・安田徹也『建築史家・大岡實の建築 鉄筋コンクリート造による伝統表現の試み』
川崎市立日本民家園、2013
椎名宏雄『沼南の宗教文化誌』たけしま出版、2020
栢木まどか監修『復興建築 モダン東京をたどる建物と暮らし』トゥーヴァージンズ、2020
『明日話せる柏学 かしわ時空散歩 近現代編』柏市教育委員会、2021

インターネット上のサイト

- 国土地理院空中写真
柏市公開型GIS [地図]

本報告書は、柏市教育委員会の刊行する「柏市建造物調査報告書」の9冊目である。

3以前の刊行物には、通し番号が振られていない。

- 1 『旧吉田家住宅調査報告書』2008
- 2 『旧吉田家住宅保存修理工事報告書』2011
- 3 『空をつくる建物 高射砲第二連隊 照空予習室調査報告書』2018
- 4 『柏の歴史ある建物 柏市建造物調査報告書4』2021
- 5 『柏の歴史ある建物Ⅱ 旧手賀教会堂保存修理工事報告書 柏市建造物調査報告書5』2023
- 6 『如春堂・芳野家住宅 柏市建造物調査報告書6』2023
- 7 『柏飛行場調査報告書1 柏市建造物調査報告書7』2025
- 8 『国登録有形文化財 染谷家住宅保存修理工事報告書 柏市建造物調査報告書8』2025
- 9 『柏の現代寺院建築 鉄筋コンクリート造 柏市建造物調査報告書9』2026
- 10 『柏飛行場調査報告書2 柏市建造物調査報告書10』2025

柏の現代寺院建築

鉄筋コンクリート造

柏市建造物調査報告書 9

発行日	2026年3月31日
発行者	柏市教育委員会 生涯学習部文化課 千葉県柏市大島田48番地1
印刷	株式会社 精興社

